
樹の、落ちる空に

あざみの茶太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

樹の、落ちる空に

【Nコード】

N7580S

【作者名】

あざみの茶太郎

【あらすじ】

中学3年生の幸は、21歳の詩織の恋人であった。年齢差こそあれど、幸は詩織を心から大切に思い、生涯寄りそっていようと誓いを胸に秘めていた。

しかし、幸は詩織の実の弟であった。中年の夫をもつ身でありながら中学生の恋人がいて、しかもそれが実の弟。詩織が、この奇絶な境遇に身をおいていたのには理由があった。

深い瞬きのあとには、窓の外はすでに夕色に染まっただけで、照葉が反す強烈な光線に、すぐめた眼の奥をつらぬかれた。

抱えていた膝から両腕を離し、その片方で烈しく降りかかる西日から目を守る。

彼女の部屋は家の西側に位置していて、暮れ方になると、窓から鋭角に射しこむ陽光が、部屋のちょうど半分だけを真鍮色に染めた。ぼくは額にかざした片腕をおろし、そつと陽のあたらない半分に移動する。

こうすると、暗順応が追いつかずに軽い陶酔感が得られるのだ。中腰姿勢を維持したまま、目くらみが止むまでゆっくりと呼吸をする。

落ちついてきたところでカーペットに腰をおろし、あぐらをかく。目を閉じるとほどなくうたた寝におよぶが、しばらくして階下からの固い金物音に浅く意識がもどる。玄関を閉める音に次いで、人が階段を上ってくる気配がし、部屋の戸が開けられる。

「幸。また来てたんだ」

まどろみから揺り起こしてくれるのは、きょうも彼女だ。このころには、むこう半分を染める暮色はいよいよ深みを増し、目前の一切が、少し前とは違う色に染め変えられている。

「なにもない部屋なのに、幸は一人でいて楽しいの？」

そう続ける彼女はジャケットをクローゼットにしまったり、テーブルの上に飾られたシャコバサボテンに一言二言、声をかけたりと、手早に作業をこなしている。返答に関心がない、というより、応答を見こして安心しきっている、といった心境に近いと思う。

「楽しいよ」

そう、と彼女は振りかえり、笑顔でまたしゃきしゃき動きだす。手際よくハンドバッグの中身を化粧鏡の前に並べる後ろ付きは、

女性らしい細づくりの骨格が姿勢のよさで際立ち、絵になる立ち姿だといつも感心する。これで、あと少し背があり、眉目に大人らしい尖鋭さがあってさえいたなら、モデル業にも就職口があったのではないかと思うほどだ。

「いつもこんなに早く帰ってくるなんて、詩織のやつてる仕事ってラクなんだね。学校卒業したら詩織と同じところで働こうかな」

「中学生ほどは暇じゃないわよ」

ほほ笑みを含んだ調子で応える。

この愛らしい声に併せて、実年より四、五歳あまり若くみえる顔立てには、ときとして七つも年上の女性とつきあっている感覚を鈍らされてしまう。

「幸」

彼女は作業の手を休め、成人にしては幼くみえる顔をこちらを向けた。

「きょうも、うちでご飯食べてく？」

「ええと。うん、そうする」

彼女は了解の旨を眼で合図して、手作業を再開した。

せつせと立ち働く彼女の様子に、はたと、ついしてしまった生返事と、日々の無遠慮な行動を反省した。

彼女はこの家に父親と二人暮らしをしている。

片親で育った生い立ちは彼女とつきあいだした当初から知っていたが、深い事情はきいたことがなかったし、むしろ知りたいなどと思っただけでなかった。

ただ、幼少から少しずつ痛みを堆積してきたであろう彼女の心中を思うと、胸に鉛色のもやのような切なさを催し、堪らなくなった。そんな彼女に対して自分のしていることは何なのか、と考える。

彼女も彼女の父親も、ぼくをとても慕ってくれていて、二人が外出しているときにも家に入れるようにと、合鍵まで作ってくれた。

恋人とはいえ、赤の他人にである。

いまある現状を一般の感覚で評価すると、恐ろしく不可解で異常

なことにも思えそうなものだが、二か月前、夏休みに見舞われた事故が原因なら、十分にあり得る事態である。

しかし彼女が、事故の責任は自分にある、と感じていて、それでこうまでしてくれるというのなら、ぼくの軽率な行動はいわばそれにつけこむ悪質なタカリといえよう。

「詩織」

知らずしてするより、知ってする悪行はそれを行う当人の精神におよぼす不利益が大きい。

「やっぱり、きょうは家に帰って食べる」

言つと、そこここで忙しく動いていた彼女の足が、目の前に止まった。

「もしかして、気をつかっているの？」

しゃがんで顔を覗きこんできた瞬間、彼女から目を逸らす。

「ちがう」

口先から弾き出した声の弱々しさと妙な早口ぐあい、自分でもおかしいと思うほどであった。

「幸」と彼女は言う。

視界の所で彼女は顔をいつそう近づけ、そして声を落した。

「幸はなにも難しいことを考えなくていいの。本当の家族だと思つてね、つて前にも言つたでしょ」

すつと顔先に眼を送つたが、わずかに覗かせた声色の翳りはとうに消えうせ、彼女はにこやかな表情をこちらに向けていた。

事故のことはなにも関係ないから。わたしもお父さんも本当に幸が好きだからそうしたいだけなのよ。なんて言われてしまつては、心の内を見ぬかれたようできまりが悪い。

「んーん。たまには家で食べないと、母さんも寂しがると思つて」
首を傾げてほころぶ彼女に、もう居た堪れなくなり勢いよく立ちあがる。

「帰るから。じゃあね」

屈んだままきょとんと見あげる彼女を置き去りにし、シャコバサ

ポテンに別れの挨拶をすることもなく、逃げるように家を飛びだした。

彼女の声は聞こえない。なにか言われたところで、気恥ずかしさにさわっただけだろうから、その点は救われた。

門口の敷石に一步踏みだしたときには、日はすっかり傾き、眼を吸いこむ徒広い空が朱を四面にしみ広げていた。

短いアプローチを抜けて振りかえると、二階の窓からは、残陽に照らされて空と同じ色に染まった部屋壁が半分だけ見えた。

「あんまりいつもお邪魔すると、しーちゃんだって迷惑よ」

箸も進まぬ口で、母さんは説教を弁じた。

「遅くなるとむこうにもご迷惑がかかるんだから。行っちゃだめとは言わないけど、できるだけ、きょうくらいの時間にはおいとましてくなさい」

うん、と返事をし、シチューのジャガイモを口に運ぶ。

母さんの指摘は的確だった。こここのところ詩織の家で夕飯を食べてくることが多くなり、こうして家の居間で落ちついて夕食をとる回数も極端に少なくなっていた。

母さんは、ぼくがいないと料理をふるまう相手が父さんしかいなくなつて、作り甲斐がなくなる、と言った。

「それに、夕食のときくらいしか話す時間がないでしょ」

母さんの険相からはしだいに怒気が抜け、やがては困り顔に変じて、口ぶりも諭すようになっていった。

「幸は受験生なんだから。勉強をしつかりやってるのか、お父さんも心配してるのよ」

「大丈夫だから」

とは言ったものの、大丈夫、ではない。

両親も詩織も、中学を卒業したらぼくが高校に進学するものと思いいこんでいる。それは当然してしまう予想、というか、世間ではもはや当然であった。

だが、夏が終わり秋に入っただけになっても、行きたい高校の方向性が定まっておらず、いまひとついえば進学するかさえ軽い気迷いが消えずにいた。

とりわけて勉強ができないということもない。だからといって好きでもなかったが、それはしばしば同年代にみられる、通有の感情程度のものだと理解している。

ただ、他人より常例への執着がなかったただけだ。

それについては自覚している。もちろん、そんなことを吐露して両親を困らせる気は露もない。

母さんの心配する目を見て、舌で弄んでいたイモの破片を飲みこむ。

「詩織の家でご飯食べてくるときは、食後に何時間かは勉強教えてもらってるし。詩織は高卒だけど頭がいいんだ」

そう言うと、母さんは憮然として鼻から小さく息を漏らした。

「たったいま、迷惑はかけないように、と言っただばかりでしょ」

「ああ、うん」

しばらく不人気であったテレビの画面に視線を遷す。

話に区切りつけることを意図している。

進路の話はしたくない。

進学したくないのではない。進学しなくてもいい、ただけだ。

常例への執着はないが、逆行する行動力も、そもそもそこに至るだけの思想もない。

同調性はある。

そうなると、結局は自宅からの最短距離で第一志望校が決まり、来年の春にはいまとほぼ同様の生活がはじまっているのだらうと、うつすら予感することができた。

ぼくは、なだらかな世界にいることを好んだ。

そして、その日々の先にある詩織との結婚を、常に胸間に納めていた。

詩織とぼくは両家が認めてる間柄で、ぼくが成人したらすぐに結婚して、以後は一生そばにいる予定でいる。と、これはぼくが勝手に立てた願のようなものだ。胸に秘めている誓いといってもいい。

詩織のことが好きだ。

好きだが、恋情とはなにか違った。

彼女の横顔を思い描いて身を焦がすこともなければ、抱きよせてキスをしたい、とか欲気をもつこともなかったのだ。

これが、年相応の未熟な心情なのか、あるいは若いながらにそういったところを越階して行きついた境地だったのかは自分でもわからないが、これまで同級生の女の子に安易に抱くことのあるあつた感情とはあきらかに線を画していた。

たとえば。毎週テレビでやっている恋愛ドラマで、かつこいい俳優が恥ずかしげもないセリフ言っていた。恋人の女の子に、死んでしまふ瞬間までずっと抱きしめていたい、とかそんなことを言っていたと思う。詩織に対しての気持ちは、それに類する慕情ではないのだ。

ただ、一緒にいてあげたいと思う。思いあがった考えにも感じるが、そう思うのだから仕方がない。

それにしても、あのドラマの人は、自分がどれだけうつつとうしいことを言っているかわかっているのだろうか。いちやもんをつけるようだが、死ぬまで抱きしめ続けられる恋人の身にもなつてほしいと思つてしまふ。

「幸、しーちゃん次はいつうちに来るとか、なにか言つてなかつた？」

「えっ」と声が出る。

「ああ、ううん。なにも言つてなかつたと思う」

物思いに耽つていておるときに声をかけられるというのは、どういふわけか気恥ずかしくて仕様がな。とくにも、どういふわけか思考が当初と関係のない、ひよんな方向へむかっているときには尚更そう感じてしまふ。

母さんはそんな廉恥心の傷痕も知らずに黙々と箸を進める。

ぼくは、無意識に動かしていた箸を今度は意識的に、ごく自然を装い動かす。

「しーちゃんも、もっと遊びに来てくれたらいいのにね」

母さんの顔を見て、うん、とうなずく。

詩織もぼくと同じように、ぼくがいないときでもたまにここに遊びに来ることがある。そういえば先週もぼくが学校から帰つて来た

とき、家にいたときがあった。

玄関で靴を脱ぎながら、談笑する母さんと詩織の声を聞いた。詩織は母さんを、おかあさん、と呼び、母さんもまた機嫌よく受け答えしていた。

その会話はとても自然で、あたかもきょうこの日まで一緒に生活してきた、本当の母娘であるかのようにさえ思えた。

二人は、本当の親子のようだった。

二人が本当の親子だったらどれだけよかっただろう。

白い水面を揺らして、ひとすくいシチューを口に運んだ。

最近の目覚めのよさといったらない。

長いあいだ思い悩んでいたことがさっぱりと解決したように心が軽い。そのためか寝つきがすこぶるよく、相乗作用でまたあくる朝は目覚めが快い。

とりわけ今朝の目覚めがすばらしいのは、祝日で学校が休みという理由にほかならない。

寝覚めからかれこれ数十分は経ったのだろうが、まだベッドのなかで目を閉じている。

朝の光がまぶたの裏に映しだす、つかみどころのない紅白の風景をずっとみている。いましがたまでは彼方まで見通せた浅紅が、今度には黒く柔らかい景色に豹変する。おぼろな世界は、刻一刻と形様を変化させた。

この心地よい感覚は、日暮れ時に詩織の部屋で味わえるものに似ている。

詩織はいまどうしているんだろう。

詩織に会いに行こうか。

ゆっくりと目を開く。

途端、まぶたの細い隙間から部屋に充満する光と空気が吹きこみ、眼前で繰り広げられた夢の世界は忽然と実体をなくした。かわりにうす明るい六畳間の天井が現れる。

ゆかに足をつき、思いきって立ちあがる。

薄い窓のむこうから、庭のもぐらよけにと父さんが取りつけた、ペットボトル風車の乾いた音が聞こえる。少し風があるのかもしれない。

身支度を整え、外に出る。

さっきのは気のせいだったのか、そこには風のない静かな祝日の朝があった。

ぐんと伸びして、心も軽く歩きだす。

詩織の家は、通学路を途中で逸れて脇道に入り、そこを抜けて大きな街路に出たところにある。そのあたりは大きめの家ばかりが建ち並び住宅街なのだが、詩織の家もまあ劣ってはいなかった。

「幸ッ」

突然の呼びかけに身がすくむ。弾んでいた踵は、びたと地面に張りつけられた。いままさに脇道に入ろうとしたそのときであった。短く深呼吸をして、うしろを振りかえる。

そこには、背丈は自分と同じくらい、目元が凜々しく生き生きとした少年がつつ立っていた。

「やつ、幸」

ひとの寿命を無造作に数秒は縮めてくれた憎むべき犯人は、んと首を傾げる。

罪がない表情の少年に大息が漏れる。

隼太の短所^{はやた}は、決して責められない悪意なき悪行をとって、それに何かとぼくを巻きこむところ。そして、そんなことが日々尋常でなく多いというところだ。

「朝から大声だして脅かすなって」

隼太は、おや、という顔をする。

「おれ、家からずつとうしろをついてきてたのに。もしかして幸、全然気づかなかった？」

その言葉に啞然となった。

まさか幼なじみに尾行癖があったとは。

いや、詩織に会うことに弾みすぎていて、気がつかなかった自分に問題があったのか。

「家から出てきたところで、すぐに声をかけてくれたらよかったのに」

ふと、ここまでの道のりを思いかえす。

「隼太、もしかして」

相当浮かれていて、無意識にスキップでもしていたかもしれない。

だとすれば、ひとり浮かれ調子の友人に隼太も声をかけづらかったに違いない。

「もしかして、飛んだり跳ねたり、してた？」

これに対し、したり、と隼太が顔に表したのを見て、ああ、なにかしくじったことを言ってしまったのだなと感じとった。

「いや。でも、すつごくウキウキしてた。やっぱり、いまから詩織さんの家に行くんだろう」

ああ、やはり失敗した。

一体どういう神経をしているのかわからないが、隼太はどんなときでも、というのはつまり彼女に会いに行こうというときにさえも、必ずくつついて来たがるのだ。

詩織さんってかわいいよな、なんて平気で言ってきたり、あまつさえ、相手がいなくなったら彼氏にしてほしかったのに、なんてことまで言ってくる。

「さ、幸。早く行こう」

もう行く気に満たされた隼太は止められない。なんだかんだで、こうやって二度に一度は隼太と一緒に行く羽目になってしまっが、それなりに楽しいのでよしとしている。

「詩織さんだって休みなんだから、早く行かないと出かけちゃうかもしれないぞ」

こう言った隼太はすでに背をむけて小道に入りかけていた。

はたと曜日を思いだす。きょうは水曜日だから、急がなければ本当に隼太の言うとおり出かけてしまうかもしれない。

それというのも、詩織の仕事は割と時間の自由が利くようで、休日でも水曜日はときどき仕事を半日休んでどこかに出かけてしまうということを知っていたからだ。

「隼太、急げ！」

先行く隼太の手を掴まえ、猛然と一步を踏み出した。が、掴んだ手が一瞬怯んだ気がしたかと思うと、追い越したそのうしろで隼太の動きがぴたりと止まった。

予想外の出来事のうえ、ことのほか強く握っていたらしい右腕は後方に引っぱられ、体が前のめりになった。

「隼太？」

振りかえって見てみると、どうしたわけか隼太は気抜けした表情をしている。

「おい、どうしたんだー」

軽い調子で笑いかけ、離れた手を顔の前でひらつかせると、隼太は、なんでもないと表情なく歩きだした。

最近、隼太の考えていることが本当にわからなくなるときがある。

あたりはもの静かな住宅地区で、並木道の広い横幅が惜しく感じられるほど往来が少ない。

詩織の家は、遠目にもわかる高い庭木が特徴で、門扉は丸っこい形をしている。門の装飾もやはり丸っこく黒光りしており、そのわきのブロッケンには『相沢』と彫られたまだら模様の石表札が詰めこまれている。

「詩織、いるかな」

「ああ。詩織さん、サブロウ出してくれるから楽しみだな」

「うん」

隼太のいうサブロウとは詩織が買い置きしているチョコレート菓子の愛称で、甘口の詩織と隼太はこれに熱中している。『サブロウなんか』というのはスペイン語で、おいしい、という意味の単語なのだそう。しかしサブロウはスペインメーカーの製品だとか、そういう特殊なものではなく、詩織が近所のスーパーで買ってくるごく普通の市販品だ。

詩織がいうには、サブロウはずっと昔に食べた覚えのあるスペインのチョコレートに味が似ているということなのだ。詩織がその思い出話をして以来、内輪のあいだだけでサブロウはこの名で呼ばれている。

ともかく門を開けて、茂る芝生を両脇に抱えた花道を数メートル進んだところに片開きのシックなドアはある。

よほどサブロウが楽しみらしく、そわそわと落ちつかない隼太を背に、玄関のチャイムを鳴らした。

隼太は小学生最後の冬に虫歯を患い、そのときの苛烈な治療に懲りてその後は甘味を控えていたのだが、近頃では過去を水に流してなおこの現状に納まった。

軽く見返ると、隼太はいまや遅しと身を小刻みに上下させている。

ここまで律儀に胸中が様子に表れるのでは、思っていることの一部が他人に筒抜けなようで、親友としては彼が不憫でならなかった。と、留具の外れる音がして、開いたドアから出てきたのは詩織の父さんだった。

「こんにちはっ」

真っ先に声を上げたのは、唐突に前に進みでた隼太だった。

「やあ、おはよう。隼太くんと幸くんだったんだね」

隼太の勢いに押されたせいかわ、隼太くんは元気がいいね、なんてことを言いながら、おじさんが一歩あとずさりしてみえる。

「さあ、とりあえず中へどうぞ」

隼太に続いてなかに入る。

廊下には、入ったことのない部屋が二つ三つあり、そこを過ぎて二階への階段の横を抜けると、白い壁に囲われたの広いリビングルームに着く。

なかは南側の壁が一面ガラス窓にされていて、部屋はそこから吸いこむ日光で充足している。

さて。隼太はどう思ったかわからないが、廊下の途中で告げられた事实に、少なくともぼくは小さく気を落としていた。詩織が一時間も前に出かけてしまっていたと知り、先に連絡していればよかったと悔やんだ。

「おじさん、おれたちお腹すいてないからお構いなく」

リビングと部屋続きのキッチンで、たぶんお茶菓子でも用意してくれているおじさんにむかい隼太は声を張りあげた。

言った言葉とは裏腹に、うれしそうな顔でキッチンカウンターのむこう側を気にする姿はなんとなくユーモラスで、落ちこんだ心にならずながら効いた。

親友とは、こういうものなのだなと実感する。

隼太とぼくは、薄青色のソファーカーバーがかけられた三人がけのフロアソファに座った。

「せっかく遊びに来てくれたのに詩織がいなくて残念だったね」

おじさんはお菓子や飲み物の乗った銀のトレーをテーブルに置き、そこを挟んでぼくらに対面するかたちでソファーに腰かけた。

「ぼくはきょう一日暇なんだけど、こんな年の離れたおじさんと話をしていてもつまらないだろうね。午後には詩織が帰ってくると思うんだけど、それだって詩織のことだからいつになるか」

おじさんはお菓子の器をテーブルに移しつつ言った。

「んーん。なにも言わないでいきなり来たぼくと隼太が悪いんだから。おじさん、仕事が休みでも何か用事があったんじゃないの？」

「きょうは本当に暇だからいいんだよ」

そう言い、空になったトレーをキッチンに持ち帰った。

おじさんはとてもよくできた人だ。

つね冷静なふるまいをする態様は、大人の落ちつきといおうか。四十近くにして、熟年者の安定した佇まいと壮丁の若々しさを兼備している。

こうやって、突然の訪問者にも如在なく対応してくれるような柔和な心性の人と暮らせる詩織は、母さんがいなくても幸せなんだろうなと、少しだけそう考えるようになっていた。

それはそうと、さつきからしんとしている隣人を見ると、元気が美点だったはずの隼太がひどく落胆した表情をしまっている。

「ちよつと隼太。詩織がいないのはぼくも残念だったけど、露骨にそんな顔してたらおじさんに悪いよ」

小声の注意にも、軽くうなずいただけで浮かない顔は直らない。

「詩織さん、どこにお出かけされたんですか？」

重々しい語調であった。

「詩織はね。きょうは、女の子の友達と映画鑑賞に行くって言うってたかな」

キッチンからもどつたおじさんは、彼の定位置に腰をおろした。

「あれ。お菓子も飲みものも進んでないね。遠慮しないでいいんだよ」

促されてぼくだけがお菓子を食べはじめ。

こういつときは手をつけずに残すほうが相手に失礼だと心得ている。黙々と食べるばかりとは対照的に、隼太はまだしよげて下を見ている。

隼太の感情のメリハリといたら、冗談では済まされないほどのだ。それもじかに表すものだから、すぐ近くで見ているこちらとしては気が気でない。

小学生のころだったか、隼太がうちに遊びに来たときだ。たまたまついていたテレビは動物モノのドキュメンタリー番組が映していた。子供のガゼルが親の目の前で肉食動物に喰い殺されるシーンをみて、隼太はまるで自分もそうであったかのように深く落ちこんでしまった。表情があまりに青ざめていたのか、その顔色を見た母さんが驚いて素頓狂な声を上げたのだった。

そのときも、きょとんとして逆に母さんを心配するという情緒転換の早さを見せた。

思いだすとおかしくなる。

ときに弱みとなるだろう生得の無垢な気質も、ぼくはきらいじゃなかった。

「ああ、二人とも」

おじさんが口を開く。

「詩織がないから、いつものチョコレートがどこにあるのかわからなかったんだ。いつも楽しみにしてるのにごめんね」

すると隼太は顔をあげて、いいえっ大丈夫です、と言って、顔を赤らめながら出されたお菓子をぱくつきだした。

なるほど、サブローが出されなかったから、さっきから元気がなかったのか。

そうとわかると、あまりの無垢さ加減に同年ながら母性に似た情が芽ばえた。

拗ねていた理由を見やぶられ、照れ隠しにむやみとお菓子にがつく姿が幼くみえてなんとほほほ笑ましい。

「あのチョコレートのことだけどね」

「サブロウですか」

隼太が興味津々とばかりに身を乗りだす。

「そう。ぼくはね、詩織がいつどこで本物のサブロウを食べたのかわらないんだ」

父親にも知らないことはあるんだ。

思えばぼくもおじさんとゆっくりなにかを話したことなんて、いままでなかった気がする。

「詩織もね、食べたときの記憶は朧げらしいんだけど、よほどおいしかったんだろうね。味が似ているっていうサブロウを見つけて食べたのをきっかけに、記憶の端に残っていたそのチョコレート思い出がよみがえったみたいなんだ」

それでね、と前置きをする。

「去年たまたま仕事でスペインに行ったんだけど、詩織があまりにも本物のサブロウはあなかったとかこうだったとか言うものだから、ために現地でチョコレートをいくつか買ってきたんだ。詩織にはどれも違うって言われちゃったんだけどね」

「おじさんて外国に行ったりするんですか」

隼太は目を輝かせて喚声をあげた。

何年かに一度、数日間だけの海外出張があることを、詩織から聞いた覚えがある。アジア圏内を抜けだすことは少ないらしいのだが、それでも日本の東半分からさえ出たことのないぼくにとってはまさに未知の世界のことだった。詩織から、おじさんの海外出張の話を知ったとき、普段はあまりおこらない熱い意欲感が胸に湧きたった。

「ぼく英語が全然ダメだから、おじさんみたいに外国に行って人と会話ができるのってすごいなって思うし、うらやましい」

隼太がうんうんと賛同すると、恥ずかしそうに「すごいことなんてないよ」と言い、おじさんは視線をあちらこちらに移して照れ笑いをした。

失礼とは思うが、どうしてもこういう仕草には年齢の遠近にかかわらず親近感を抱いてしまう。

「でもさ、面倒だとか、イヤだなんて思っても仕事だから行かなくちゃならないでしょ。なんだか大変そう」

「そうだねえ。ぼくとしては気が進まないってことはあまりないかな。いつも新鮮な発見があるから楽しみなくらいだよ」

そう言ってビスケットをひとかけらつまんだ。

「外国語だつて英語を学生時代に勉強した程度だし、行くときはその国の挨拶とか必要な言葉だけを覚えていくくらいだからね。本当にすごくなんてないよ」

おじさんの話に隼太はいかにも心を惹かれたようで、仕事の内容から職場環境、ついには俸給にまで質問は発展した。

おじさんは海外出張を楽しみにしていると云ったが、それは言葉の上でのことだ。結局は仕事なのだし、まして、成人しているとはいえ娘をひとり残して行く不安があるのだから、関心こそあれ待望の感はないはずだ。

「そういえば、詩織さんはどういう仕事をされているんですか」

隼太の不意の発問に心臓が一瞬強く脈打つ。

「詩織の仕事かい」とおじさんは応じる。

動悸の原因は、詩織の仕事をまったく知らなかったところにある。これまで長いあいだつきあってきたが、不思議と最近の詩織をあまり知らなかったのだ。

別段知ろうとしなかったただけだが、いざ知れるとなれば関心がひかれるのは当然だ。

「詩織はね」

静かに耳をかたむける。

「いまは心理カウンセラーをやっているんだよ」

「カウンセラー、ですか」

心理カウンセラー。

なんだか、すごく特異な職種に思える。

「詩織さんがカウンセラーをやっていたなんて意外ですつ。カウンセラーって、いろいろな人の悩みを解決してくれるんですね」

「そうだね。ただ彼女はフェミニストカウンセラーっていったね、女性専門のカウンセラーなんだ」

そうなんですか、と隼太は肩を落とした。

もしかしたら、自分の悩みでも聞いてもらいたかったのかもしれない。

「でもね、まねにだけど男性の相談を受けることもあるらしいよ」「しゅんとした姿におじさんも気づいたらしく、励ますように言いくわえた。

「本当ですかっ」

たちまちに元気を取りもどす。

隼太の態度は手に取るようにわかりやすい。

「本当だよ」

おじさんにはっこりしてビスマットをもうひとかけら口に運んだ。「休日は詩織も暇にしていることが多いから、隼太くんも幸くんも相談ごとがあつたらきいてもらうといいよ。なんといっても専門家なんだからね」

隼太は嬉しそうに、はい、と声を弾ませた。

「幸くんも、遠慮しなくていいからね」

「ありがとうございます」と返事はしたものの、詩織に相談だなんて考えられない。

並程度の憂き目をみるくらいでは決して屈しない鉄腸をもった詩織は、過去を顧みても弱みをのぞかせたところなど、ほとんどみた記憶がない。

だがそれゆえに、予測もできぬ瑣事をきっかけに心に凶変など起きたりはしないかという恐怖があった。くわえて、取るに足りない悩みに共感させて、無用に心を傷つけてしまう心配も併存していた。だから、相談などできない。

隼太は。

満足げにお菓子を頬張って別の話をしはじめている。

ひとの心事をくどく商量するぼくの癖などは、ただのお節介とし

か思わないたちの隼太だから、きっとそのうち詩織になにか相談を持ちかけるだろう。

我が身の所在には差しつかえとなる不安の心情が、隼太のときには湧きおこらないのは、積年が裏づける信頼があったからだ。信頼があつたから、制止しようとか無粋な発想には至らないし、いつそ、よい友人をもつた、とうれしくなるほどなのだ。

隼太は、それだけの信用を得られる人間だった。

人見知りも選り好みもしない、天性の『人に好かれる気質』による驚くべき順応性には、舌を巻く機会も少なからずあつた。

実際、この異色の組みあわせで行われた鼎談は、潤滑役となつた隼太の働きで思いがけない盛りあがりを見せた。

「喉が乾いたね。飲みものをついでくるよ」

おじさんはキッチンカウンターの裏に入っていく。

歓談がひと区切りついたのは正午まわつたところで、実に二時間ものあいだ、ジュース一杯で保たれた隼太の喉には感服してしまう。

「おじさんって話がおもしろいな」

隼太は小声でささやきかけてきた。

「うん。こんな長く話したのはじめてだったけど、なんだかいねいろんなこと知ってるし、それよりも人の心をつかむ極意を知ってるって感じがしなかった？」

二回りも年の離れた少年の心がかめるのだから、それは本物だと思つた。

「二人でぼくのウワサ話かい」

はつと顔を上げ、こちらを見おろすおじさんと目があつたらしい隼太は瞬時に口を開いた。

「いや、あの、おじさん」

どうにかとり繕おうとカラカラの喉から絞りこぼれた声も、最後に、すみません、と出ただけで情けなく終わった。

「謝らなくていいんだよ」

おじさんは正面に座り爽やかに笑いかけたが、隼太はそのままう

つむいてしまった。

「ぼくたち勝手なことしゃべってて、本当ごめんなさい」

「いいんだよ。ぼくのことを褒めてくれていたんだよね。どうもありがとう」

こそばゆい顔をしたおじさんは、腰を浮かせて両腕を前に伸ばし、平手をぼくと隼太の頭に乘せた。

そろりと隣を覗きみる。

隼太はおじさんの表情をおずおずと窺い、言葉に他意がなかったことを確認すると、こちらを向いて、にっとした。

「でもね、ぼくなんかよりも詩織の方がもつとすごいと思うよ」

おじさんは姿勢を直して神妙な面もちになった。

「詩織さんの方が？」

「そう。詩織にいまの仕事を勧めたのはぼくなんだけどね、それとというのも、彼女がもっている特別な力に気づいたからなんだ」

「特別な力ですか」

「そう」

おじさんは小さく咳払いをした。

「詩織はね」と続ける。

「どうも詩織は、人の心が読めるらしいんだ」

まさか。

オカルトごととはきわめて遠いところで生活を送ってきたであろう、堅実で主知的なはずのおじさんが、こんなに奇抜なことを言いだすなんて。

仮に詩織が超自然的な潜勢力をもっていたとして、いまのおじさんの超超自然的な、つまり不自然な発言には圧倒される、とどぎまぎする頭のなか思った。

外界から切り離された白い箱のなかは水を打ったように静まる。

かつては絶対だったぼくらの尊敬も、犯しがたかった地位も、ただの一口で揺らいでしまうとは、人生わからない。

「心が読めるっていうのは、つまり、詩織さんがエスパーかなにか

ということでしょうか？ それとも、その、おじさんがそう思いこんでらっしゃるだけでしょうか……」

恐る恐る、それでも核心に迫った質問を隼太は投げかけた。

室温が下がりはじめている。湿度が高まり、襟首にあたる髪の毛がどうにも気持ち悪かった。

おじさんは、おそらく切実な面持ちをしていたばかり二人を幾秒かのあいだ真顔で見つめ、さらにひと呼吸、ふた呼吸おいてから、ふっと目元の筋肉を和らげた。

「もちろん、超能力といった類の意味あいで、ではないよ」

瞬時に部屋全体に張りめぐっていた緊張の糸が解きほぐれる。

気がどうかしてしまっただのではないとわかり、胸をなでおろす。

「エスパーじゃないなら、詩織さんはどうして人の考えていることがわかるんですか」

ぷっ、と小さく噴きだしてしまった。隼太の言う、エスパー、がどうもぼくにはツボらしい。隼太は、どうした、とわけがわからない様子で尋ねてきたが、それがまた滑稽でふたたび噴いてしまった。「二人をみていると心が穏やかになるよ」

隼太は軽く混乱してこっちを見たりそっちを見たりしていたが、ぼくもおじさんも、それがおもしろくてあえて放っておいた。

「詩織はね、人がなにを考えているかとか、どういう心情でいるかというのを、他人よりも少しだけ感じとる能力に長けているんだ」

言い進める口調は神妙だが、目顔は、愛おしいひとを想う温かい色をしている。

「どんな小さな言動からも多くのことを鋭く感取する力っていうのかな。でも、それで他人の心を見すかして蔑むのではないんだ」

うん、と確信だち唾を飲む。

「わかるうとするんじゃないなくて、彼女には自然とわかるんだらうね。相手がどんなことをしてほしいのか、どんなことを言ってほしいのかを理解して、望むとおり接しようとしてくれるんだ」

おじさんのひとこと、ひとことがぼくの知らない詩織だった。

「しかも、それを無意識にやっているようなんだ」

もつとも、意識して人の考えがわかっってしまうんだったら、繊細な詩織は傷ついて参ってしまうだろうけどね、と結んだ。

隼太はほうと感心しているが、ぼくにそういう素直な感情が兆すことはなかった。

ぼくの知らない詩織は、ぼくの知らないところで生まれたんだ。

たあいな話題も尽き、一段落したところに詩織は帰ってきた。

「来てたんだ。二人とも、いらっしやい」

リビングに入ってきた詩織は、両手に大きな買い物袋をぶらさげていた。

「詩織さん、お邪魔してます」

隼太は敬礼でもしそうな勢いでぴつと立ちあがった。

「おじさんにいろいろな話を聞かせてもらってました」

そう、とほほ笑みキッチンに買い物袋を運んでいく。

おじさんは役目を終えた老兵のように、悔いのない顔でリビングを出ていき、隼太は起立したままそれを見送った。

「もしかして、あれってサブロウじゃないか」ソファに腰かけるや否や、隼太は顔を近づけ声を小さくした。

「もしかしてサブロウを買いにいったのかな」

キッチンカウンターに置かれたビニール袋はうっすらと透けていて、目敏くも隼太はそれを見のがさなかったのだ。

「ストックがなかったなら、おじさんがいくら探してくれても見つかるわけがなかったんだね」

どう考えても買い物は映画のついでだろうが、そんなつまらない難癖をつけるほど隼太が憎くはない。

「いま、買ってきたサブロウとジュースを出すから、ちょっと待っててね」

「はいッ。詩織さん、どうぞお構いなくー」

キッチンカウンターから顔を覗かせた詩織に、隼太は紅顔を輝か

せた。

隼太念願のサブローを持ってきた詩織は、お菓子の食べ残しが散らかるテーブルを見て、はっと目を丸くした。

「もしかして、二人ともお昼ご飯まだじゃない」

「はい。でも、お菓子はたくさんいただきましたのでっ」

「ごめんね」詩織は苦笑した。

「おじさんはいつも昼食を食べないから、二人のこと気づかなかったのね」

詩織は、腕まくりをして手料理をふるまってくれることをアピールした。

「朝からずっと出かけてたんでしょ。いまも帰ってきたばかりで疲れてない？」

「あ、そうですねよ詩織さん。本当にお構いなく」

詩織は、立ちあがる隼太の両肩に手を置いてすくとんと座らせた。

「大丈夫よ。ずっと、お友達の家でお茶してただけだから」

そう言って、優しく笑った。

幸は、わたしの実の弟だ。

でもいまは、わたしを恋人だと思いこみ慕ってくれている。

はじめは困惑したが、いまではもう日常として受けいれている。

「詩織、このサラダおいしいね」

口をもごもごさせながら笑った春樹に、わたしも笑顔を返した。

「春樹の好きなシソの葉が入ってるからかな」

「うん。そうかもね」

そもそも春樹は食悦を感じるということがないらしい。

それでも一日に一度わたしが手料理を披露する夕食では、本当はさして関心もないのに、作った料理を必ず褒めてくれる。

この心づかいがとてもうれしい。

「今夜は幸くんがいたら大喜びしそうなメニューだったね。せっかくだから呼べばよかったんじゃないかな」

春樹は幸にも優しい。

「先月はずいぶん来てたから、幸も気をつかっているのよ」

「そんなのいいのにな。詩織と幸くんはきょうだいなんだから」

「でも幸が来たら春樹はまた、わたしのお父さんになるのよ」

これには春樹も苦笑いした。

確かに二十一歳のわたしと三十九歳の春樹では、幸にしたら父と娘だと思ったほうが納得がいく組みあわせなのかもしれない。しかし、身なりには努めて気をかけ、大抵は年よりも若く見られる春樹にとつて、幸の評価は少なからずショックだったに違いない。

「幸くんが詩織の恋人になってからのどのくらい経ったかな」

「そうね。七月の終わりごろからだから、三か月くらいかな」

中年の夫をもつ身でありながら中学生の恋人がいて、それが実の弟だというのだから、こんなに込みいった話はない。

「どうしたんだい」

首を傾げる春樹に、奇絶な境遇に酔いしれてただけよ、と答える
と、そっか、と言い春樹はまたシソの葉をつまみはじめた。

「そういえばシャコバサボテンが花を咲かせたのよ」

「もっ?」

「うん、きょう帰ってきて部屋を見たら」

ふーん、と言った春樹の声はため息にも聞こえた。

あのサボテンは、夏に春樹が買ってきてくれたものだった。

ちょうどクリスマスくらいに花を咲かせるんだって、ロマンチッ
クだね、という春樹の言葉を思いだした。

「ちよつと早く咲いちゃって残念だったわね」

「そうだね」

寂しそうに呟めく春樹は、また小さなシソの葉をつついた。

こういうことは、男性が女性を慰めるのが普通だから、いまのは
少しおかしかった。

「クリスマスまで咲いてるといいわね」

「うん。幸くんも、それくらいまでには治っているといいね」

口元をゆるめた春樹のフォークから、シソの葉がはらりと皿に落
ちた。

それは幸の夏休みにあわせて計画した小旅行の初日に起こった。

はじめは春樹と二人きりで行く予定だったが、がんばっている受験生たちにほんの数日だけでも海で羽を伸ばしてほしくて、幸に話をもちかけることにしたのだ。

「わたしと春樹だけじゃつまらないもの。幸はお友達を誘っておいでね」

「うん。でもせっかく姉ちゃんたち二人で旅行する予定だったのに、いいの？」

「わたしたちは行こうと思えばいつでも休みをとって行けるもの。春樹だって幸と海で遊ぶの楽しみにしてるのよ」

もう四十になるのに大丈夫かな、なんて失礼な幸の言葉。春樹が聞いたらきつとひどくがっかりするわ。

幸は幼馴染みの隼太くと沙奈ちゃんを誘い、合計五人の行旅となった。

小さいころはよく三人が家に集まって遊んでいるのを見ていた。

嫁いではめつきり会わなくなってしまうたが、いまもたまに実家に帰ると、隼太くんをよく見かける。年ごろなのか、沙奈ちゃんが家に来るのは滅多になくなってしまったらしいけど、学校ではいまだ三人仲よくやっているといるということだ。

「機嫌がいいね」

そう言う春樹も機嫌顔だ。

「この旅行、幸があっさりとおツケしてくれただから」

中学にあがったくらいから、幸はなにかに悩んでいるような険しい顔つきをよくするようになった。それに、わたしにどことなく遠慮がちになり、よそよそしい態度をとるようになっていた。母は、幸も思春期なのよ、と言っていたが、いつまでもじゃれてきてほしいかわいい弟が離れていくのは寂しかった。

実家を離れて春樹と住むようになってから、幸の姉離れは、より進行したように感じていた。

「催事とかでなければ幸くんとも会わなくなっていたね」

そう。だから、幸ともひさしぶりに楽しい時間を過ごせると思うと、予定の日が楽しみでならなかった。

「春樹も風邪なんかひかないように体調に気をつけておいてね」

きょうは朝から気分がいい。

からだに纏わりつく爽気が心地よい目覚ましになったのだ。

となりのベッドはもう空になっていた。寝室の外からは、聴覚検査の機械で聞かされるような周波数の高い音が細く聞こえてくる。

きょうも春樹は早くに目が覚めて、見もしないテレビをつけたままソファで安らかにうたた寝をしているのだろう。

リビングに行くと、テレビは静かに朝のニュースを映していて、

春樹はその前のソファでほうけていた。

「おはよう、春樹」

「おはよう」

眠り目でこちらに振り向いた春樹だったが、わたしがよほどさすがしい表情をしていたのか、なにか感づいたようにすぐ刮目した。

「なんだか機嫌がいいね」

「夢のなかでも春樹は同じことを言っていたわ」

春樹は、今朝はぼくも気分がいいからたまには朝食でも食べようかな、と調子をあわせてくれた。

微弱な電子音を発生させていたテレビを消した春樹は、水を汲みにキッチンにきたわたしをカウンター越しに見つめた。

「どんな夢を見たんだい」

「幸が恋人になった旅行の夢」

「珍しいね」

珍しいことではなかった。

何度か同じような夢を見たが、幸への罪悪感からかそのほとんどが悪夢だったのだ。

あまり思いたしたくないことを夢で見せつけられるのは正直つらかったが、春樹にまで陰鬱な気持ちや伝染させるのはいやで、夢を見ても話さずにいたのだった。

コップに三分目まで水を注ぎいれ、一気に飲みほす。

「ねえ、きょうはお休みだし、どこかに行かない？」

「それじゃあ幸くんたちを誘って海にでも行こうか」

春樹の悪い冗談に二人して笑った。

「もうこりこりよ」

それじゃあ近所を散歩しよう、という安直な提案にわたしは諸手を挙げて賛成した。

普段は白い通りも、この時季は朽ち葉の色に染まっていて、一足ごとの歯切れよい葉音は耳に心地よかった。

高い空に眼を投げると、途方もない碧瑠璃に吸い込まれそうになる。

「上を見ながら歩いてると転ぶよ」

「大丈夫、つまずいても春樹がささえてくれるから」

仰いだまま、春樹を探って左手を右往左往させていると、先に春樹の大きな右手がわたしの手を捕まえ、柔らかく包みこんでくれた。

「ありがとう」

「どういたしまして」

首の角度を少し変えると、秋空が春樹の顔に隠れる。

わたしより顔ひとつぶん背の高い春樹と、目が合う。

春樹はいつも笑っている。

「公園でひと休みしたら詩織の実家に行こうか」

春樹はとても気がきく。

うちに行こうと言うのも、たぶん、そろそろお昼だからだ。

春樹はお昼を食べない。お店に入っただけの外食になると、わたしが落ちついて食事をとれないだろうと、気をまわしてくれたのだ。

「うん。それじゃあ、うちに行こう」

春樹に強くもたれる。

わたしは、これだけできた旦那さんをもてたことを幸せに思う。

どこからか、すすきのそよぐ音が聞こえてくるすがすがしい休日

の空に、ひとことお礼を言った。

玄関の引戸を開けたところで、外出しようと靴を履いていた母と鉢合わせになった。

「ただいま」

「あら、しーちゃんと春樹さん」

お邪魔します、と愛想よく挨拶する春樹をさっさと先にあがらせ、わたしは狭い玄関に母と二人きりになった。

あまり春樹と長話をさせると、あからさまに秋波を送る母が恥ずかしいからだ。

「来るなら電話してくれればよかったのに。お母さん出かけちゃうのよ」

「さっき急遽くることにしたの」

「ご飯もまだなんですよ。春樹さんが来てくださるならおいしいものを用意したのに。出かけるのやめにしようかしら」

家の奥を見て惜しそうに言った。

「お母さん、恥ずかしいからやめてよ」

こう言つと、母は決まって少女のように笑うのだ。

「どこに行くの？」

小綺麗な洋服に身を包んだ母を見ると、もうずっと昔の授業参観を思いだす。

「パートの友達とレストランで食事するのよ。幸はお友達のところでお父さんは居間できのこの夕飯の残りとラーメンを食べてるから、悪いけどあなたたちも適当に食べててね」

母はそう言つと、洋服のラメをきらきらさせながら、玄関の戸を閉めた。

いつまでも母は若かった。

母と同様に父もまた若く、幸の部屋を身ひとつで修築した男様は、父の威厳を確固として抜けぬものとした。

懐かしくなり、表戸と対面する幸の部屋の戸に手をかける。

半開きになっていた戸の先は、かつての物置部屋。寒々しかった六畳の和室が、いまはすっかりカーペットまでひかれて立派な幸の居室となっている。

幸も小学生のあいだは文句を言わず、奥の八畳間をわたしと共有していたのだが、中学生になり、羞恥心が芽ばえたのだろう。自分の部屋をほしがり、実質あき部屋となっていた物置部屋に目をつけたまではよかったが、玄関の目前では冬は寒かろうと、母が断固として認めなかった。

父は割と寡黙なほうで、一目のかぎりでは敵味方もない態度にみえた。だが、母と幸がやりあった週の日曜、ひとりホームセンターから大量の石膏ボードやら保温資材やらを購入してきて、からにした物置部屋を内側から補強しはじめたのだ。

あまりのことに母は度肝を抜かれ閉口したが、ただ黙々と作業する父には、えもいわれぬ威風があった。

夫婦間のいざこざが少ないのも、こういう細事がことなく済んできたのも、父の男気があったからこそなのだろうと感銘を受けた。

できあがりがまた驚きで、素人が酔狂でやった日曜大工とはとてもいえない仕上がりがだった。壁全面が二重構造になった部屋はまさに母の要求にかなうものだったのだ。のちの話では、仕事で好意にしていた業者さんから、ものの数日で多くの助言を引きだし、準備していたのだそうだ。

かくして完成した個人部屋だが、幸がこれからもつと体が大きくなってわたしの身長を追いこすくらいになったら、ここも狭く感じてくることだろう。あるとき母の言いつけにしたがい専用部屋をもうちよつと我慢していたなら、わたしと使っていた八畳の部屋を自分のものにできたのに、なんて後悔する日がくるのだろうかと思うと少しおかしかった。

ちなみに、幸と共有していた部屋にあったわたしの私物だが、結婚して家を出るとき、ほとんどいまの家に持ちだしたか、処分して

しまった。住み主を失い、なにもなくなつた八畳間はしだいに物置部屋になりつつあつたが、これではいけないと決起した母によつて、いまでは母専用の衣装部屋として活かされている。

それにしても、物置とまでは言わずとも、この部屋もかなりしなびている。

目にとまる大物家具は机、本棚、タンス、ベッドだけでさして圧迫感もないし、割合に几帳面な幸だから雑物が散らかつてもない。それはいいのだが、部屋のなかほどまで入ると、真横の窓から射しこむ光に照らされ、大量に漂う粉塵が見えるのだ。見れば本棚の天板には埃が膜を張っている。

こんなのを実見してしまうと、普段きちんと掃除をしているのかと不安になる。

幸は、割合に几帳面だが、適度に無精なのだ。

机に近づく。かろうじて机上は埃をかぶつていながつたが、それより目についたのが、幸には似つかわしくない歴史小説の文庫本だ。机のはしに数冊、カバーがはずされた裸の状態で重ねられており、よれた紙質に、シミの斑点と紙ヤケが著しいそれらは、まさしく母の蔵書であつた。

思えば、いま幸がはまっているテレビドラマに、高校の剣道部が舞台のラブコメがあつた。この本はおそらく、剣豪が登場するそのドラマの影響だろうが、そこで剣道を試みたいと考えるのではなく、屋内娯楽にはしるのがなんとも幸らしい。また原作本に興味をもつのではなく、ひょいと飛躍して歴史小説なのだから、この感性はおもしろい。

小さいころから、とにかく目に入る物事の影響を受けやすく、三日坊主も多かった幸だが、片一方で自分の意志や信念はかたくなに曲げない、父の性格にも似た男臭さがあつた。

結局、幸も男なのだ。

男の子なんてきつとすぐに成長してしまうから、この部屋も遠からず住み主を失ってしまうのだろう。考えると、切なくなつた。

わたしが家を出たときも、もしかしたら、父と母はこんな気持ちになってくれたのだろうか。

退室し、黙って戸を閉める。

目を閉じ、鼻を澄ますと森林の匂いがする。母の趣味で玄関に据えてる香木片の香りは、いつまでも懐かしい。

さあ、と気持ちを切りかえ、奥の居間に進み入ると、さっそく父に捕まった春樹がビールを勧められていた。

「お父さんただいま。昼間からお酒なんて飲んでて大丈夫？」
「せっかく春樹くんが来てくれたからな」

いま開けたところだ、と言いつつ訳した父だったが、すでに肌は赤らんでいて、見るとちゃぶ台の翳には口の開いたビール缶が二、三本並んでいた。

「飲みすぎないですよ」春樹のとなりの座布団に端座する。

「仕事は順調か」

「うん、難しいけど楽しいよ」

いまの仕事に就いてそろそろ二年になる。高校を卒業してすぐに就職した職場はすぐに辞めてしまった。春樹と出会った職場だ。

女性従業員は結婚したら退社することが慣例となっていた会社で、わたしは働き続けたいと申し出たが、遠方の支店に転勤することを条件に出されたので仕方なく退社した。

春樹はかけあってみると言ってくれたが、わたしは所詮、契約社員の身だったし、せっかくなかなかいい給料を貰っている春樹までいづらくなつては困るので、それはいいと断つたのだった。

「詩織はいまも毎日がんばって勉強してますよ」

日中はあまり食事をとりたがらない春樹だったが、きょうは父につきあつて枝豆を少量ずつながらもつまんでいる。

「春樹くんが紹介してくれたんだね。詩織に合う仕事を見つけられてほんとう感謝しているよ」

最初、両親は心理カウンセラーになることに猛反対した。あまりにとめるので二人に真意を質したのだが、口を濁すばかりで要領を

得られず、結局、最後には煮えきらないまま渋々承知してくれたのだった。

「そういえば、幸は？」

すいてきた小腹に菜っ葉を一枚入れ、父の顔を見た。

「仲間の家に遊びに行っただんじやないか」

勢いよくコップの中身を呷り、またそこに缶から半分くらいビールを注ぐ。

「受験生なのに大丈夫なのか……」

父は幸の高校受験を痛く心配している。

父の実家は裕福ではなかったそうで、父は中学を卒業してすぐ職に就いた。

上級学校に進学してもっと勉強をしたかった父は、わたしと幸に同じ思いをさせなくなかったらしい。わたしが高校を卒業してそのまま就職したことに父はなにも言わなかったが、他日、大学まで進ませ、たくさんのことを勉強させてやりたかった、と父が悔やんでいたことを母に聞かされ、胸が痛んだ。

「それに、まだ詩織が姉だったことも思いたさないんだろ」

「そのことで勉強に支障をきたすことはないから大丈夫よ」と宥めると、そうか、と声を落とした父はビールをもう一杯注いだ。

「ただいまっ」

「おじゃまします」

あかるい幸の一声と、あれはたぶん隼太くんと思われる威勢のいい挨拶が廊下に響いた。

「噂をすれば影ね」

一瞬だけ軽快に重なるふたつの足音が聞こえて、すぐに部屋の戸の閉まる音がした。幸の部屋に入ったのだろうか。

「詩織、春樹くん挨拶をするよう幸を呼んできなさい」

「いや、ぼくはいいですよ。せつかく友達が遊びに来たのに邪魔をするのは気が咎めます」

そうはいかと押し問答の体勢をとる父を制止して、わたしは幸

を呼びに部屋に向かった。

「幸」

戸を開けた途端、二人はゆかに座ったままぎよつとしてこちらに向きなおり、背後になにかを隠したようにみえた。

「詩織、来てんだ」

「詩織さん、こんにちは」

わたしの出現にあきらかに動揺し、平静を装おうとする二人だったが、思春期の男の子たちが慌てて隠したなにかを詮索するほど野暮ではない。

「隼太くん、こんにちは」

会釈に対して、隼太くんはこわばった笑顔でわたしを見あげた。

「いまね、おじさんも来てるのよ。だからちよつと顔ださない？」

幸もまたばつの悪い顔をしていたが、「わかった」と言って視線を下に逸らした。

それじゃあ先に行ってるからね、と早々にひきあげる。

隼太くんは幸がわたしを恋人だと思っていることを知らない。だから、たまにわたしを交えて三人で話をする、二人の会話がかみ合わなくなつて、そのちぐはぐさといつたらない。

思わずしまりのなくなつた顔面の筋肉をきゅつとひきしめ、居間の敷居をまたぐと、そこでは父がまた春樹に杯を差していた。

春樹の赤鼻といつたら目を覆いたくなるほどで、往訪してからの短い時間で父より赤い顔になってしまっていた。春樹は極端にお酒に弱いわけではないが、ふだん食事をとらない時間に飲んでしまつたために、酔いに拍車がかつたのかもしれない。

「幸はどうした」

「いま来るつて」

父ではないが、このごろは幸が気かりでならない。

いつまでもわたしの恋人でいてはいけないのだ。

「難しい顔をしてないで、たまには詩織も飲もうよ」

近くで見ると、春樹の目のまわりには赤い血が駆けめぐっている。

「詩織？」

「うん、どうしようかな」

春樹がわたしにお酒を勧めるなんてどういうことだろう。

春樹は無意味な言動は極力避けるひとで、一挙一動になにかしらの意図がある。誘った理由が、ただ酔って気持ちよくなった勢いからなのか、それとも違った目的があったのかを、ただほの赤いだけのポーカーフェイスから推しはかるのは困難であった。

「だって、子供たちがいるのにおとな三人が酔っぱらってたら恰好がつかないじゃない。それに、昼真つからお酒を飲んでものなんて見られたら、わたしまで幸にノンベエだと思われるわ」

「すっかり恋人だね」冗談めかす春樹に、ばか、と小声で返す。

この春樹の様子だと、珍しいことにただの酔いからお酒を勧めたとみえる。

「たまにはお父さんにつきあってくれてもいいじゃないか」

言ったそばから、わたしの目の前に置かれたコップには父の手によってお酒がなみなみと注がれた。

「もっ」

ため息を混じえ、口をつける。

春樹と二人がかりで父の酒をやつつけるのなら、と思ったが、からになったビール缶は端に寄せられ、いつの間にか相手はキツめの焼酎になっていた。

「昼間からこんなに強いお酒飲んで」

こんなのを飲まされて、春樹の赤い顔がやがて土気色に変わらなしかとひやひやする。が、心配をもつかの間、すでに口数の少なくなった春樹は、父の話に熱心に相づちを打つだけになっており、これは懸念したとおりになるのも時間の問題と観念せざるを得ない。

幸が来てくれれば、春樹は幸を口実に父の酒から逃げられるかもしれない。それまでは、わたしが春樹に代わってこのどぎつい米焼酎と勝負するしかない。

「幸のことだけだな」

酔うと同じことを繰り返かえし話す父は、どうせまたわたしのこととを言うに違いない。そうになると長くなるから先手を打ってその口を押さえてしまう。

「大丈夫よ。わたしだって心理カウンセリングを始めて短くないんだから。わたしを信じて、まかせてって言ったでしょ」

父は黙ってうなづく。わたしの提案した幸への接し方に、いまは納得がいつているようだが、それでも合点がいくように説明するのは容易ではなかった。他人のカウンセリングと同様に、絶対の確証があるわけではなかったから。

海で溺れた幸は、病院に運ばれた二日後に意識を取りもどした。

記憶障害を負った幸に母は一時、半狂乱になった。わたしもまたそうで、救助された幸の青ざめた顔を見てひどくとり乱していたらしいが、そのことはよく覚えていない。

幸の意識がもどらないうえ、わたしと母がそんな状態では父と春樹にどれだけ苦勞をかけてしまったか知れない。

わたしが気を持ちなおしたのは、おかしなことに当事者である幸の意識が回復したときよりもあとのことだった。

はつきりと思いだせるのは、すっかりよくなった幸と病室で楽しく会話をしているあたりから。

それ以前を思いかえすと、頭のなかで白黒映像が無音再生される。あまりに曖昧で、現実ではなかった気さえしてくる。

幸の意識はまだもどらない。一日中泣きじゃくって、すっかり枯れ果てたわたしをモノクロの春樹は穏やかに慰める。病院のただっ広い廊下の隅で床にうずまっていたわたしに手を添えて、優しく立ちあがらせてくれる。

ほら、と視線が指すほうに眼を向けても、窓からは灰色の夕日しか見えず、心悲しくなっただけわたしはまた泣きだす。

春樹は絹のように、しなやかに、わたしを優しく抱きしめる。

それでもこの日のわたしは泣きやまない。

まるでわたしは春樹をこまらせるために生きてるみたい。

春樹を苦しめている。春樹にいつも寄りかかっている。

ああ、思いました。たしか結婚したのも春樹をいのように利用するためだった気がする。

はやく実家を出たかったから。お金に不自由しそうな春樹を見つけてさっさとこの人と結婚しようとしたんだった。

もしかしたら愛してなかったかもしれない。

それなのに目の前の春樹は一心にわたしを想ってくれている。
もうダメ。きょうまで平然と春樹を騙してきたけど、やっと良心
が気づいたみたい。

あすも幸が目を覚まさなかつたら、春樹に離婚の話をしよう。
春樹、いままで欺いてきて、ごめんなさい。

昼間の、ものやわらかな太陽光の明るさと、夜の人工的な蛍光灯の明るさは全然違っていて、でもわたしはそのどちらが好きということもなかった。目を瞑っていても異様な明るさが角膜を貫く居間の照明には、とくに昼寝明け、漠然とした心地よさを感じる。

「そろそろ起こしてあげたほうがいいんじゃないかしら」
台所の方から母の声がした。

「でも、せつかくよく寝てるのに」
まだうす明るい夢現にあるわたしのすぐそばで幸が言った。

「そんなこと言っても、もうご飯だもの。いいかげん起きないと帰れなくなっちゃうじゃないの。しーちゃんが困るのよ」

うす目を開けると、春樹が父とテレビを見ながらなにか話しているのが見えた。

だれかが気をきかせて頭の下に挟み込んでくれた座布団が柔らかい。

「詩織」

狭い視界が遮られ、なにかに触れられた服と二の腕がこすれた。
「もう七時になるよ」

その幸の声はあまりに小さくて、起こそうとしているのか起こすまいとしているのか、わからなかった。

「ほら、声をかけても起きないよ。熟睡してるんだって」
「しょうがないわね」

部屋に母の気配が入ってきた。

「じゃあ、もう少しだけ寝かせてあげましょう。お父さんが飲ませるから悪いのよ」

ちやぶ台に食器類の乗せられる音が聞こえる。もう夕飯の準備ができたのだらう。母の気配はまた台所へ消えていった。

相変わらず視界に被さっているのは幸らしいことがわかった。

幸は身動きもせずにと同じ状態にいる。テレビにでも見入っているのだろう。

幸がおとなしい性格なのは前からだが、それでも小学生のころは休みになると外で友達とボールを蹴っていたし、地区の少年野球にも参加していた。

とはいっても、あのころはうちにテレビゲームとかの凝った室内用玩具もなかったから、男の子からすれば外で遊んでいたほうが楽しかったろうし、少年野球も子供会の不文律でなかば強制的に参加させられていただけなわけだから、縛りがなくなったいま、やっと本来の生き方をしているとわれればそれまでだ。

当時の幸はとにかく無防備で、思春期特有の、家族に対する構えた態度というものが一切なかった。

寝室もいっしょだったから、よく幸の寝顔を見ては心をなごませていた。だが成長の早さというのは思いもよらないもので、まさかものの数年で、それさえ難しくなるとはまったく予想だにできなかった。

だからこそ、悪い考えと理解しながら実感してしまっている。恋人になつてくれたおかげで、反抗期まっ直中だったはずの幸と、また気詰まりのない家族の関係になれた喜びを。

わたしの部屋にいる幸は、ありし日のままのあどけない顔つきをしている。わたしが帰宅しても気づかずに、座ったままうたた寝しているのだ。ときどき、風に揺らされた前髪がおでこにかゆいらしく、目を閉じたまま、にい、と笑う。

この幻のような不定の日々も、一時なのだろう。

今後、たとえ幼い日の無邪気さはもどらなかつたとしても、姉としては、ぜひ隼太くんのような、活発な男子になってほしいと願ってやまない。

そういえば、隼太くんはもう帰ったのかな。

帰る前にこの部屋に寄っていたら、幸の友達にまで酔い臥している姿を見られたということになる。

情けない。

「幸、おかず持っていくの手伝って」

ふいに母の声が耳に入る。

そうだ、わたしったら、なにしてるんだらう。

夕食の準備だ！

「手伝うっ」と急に上半身を起こしたものだから、目の前にいた幸はそれは驚いた顔をした。

その表情と、まぶしい部屋の明かりに一瞬目をすぼめた。

ずっと背をむけてテレビを見ていると思っていた幸は、わたしの方を向いていたのだ。

「ごめん、寝ちゃってた」

春樹と父もこちらを見て、大丈夫か、ときいてくる。

「大丈夫？」

ひときわ心配そうにしずしず尋ねる幸に、幼いころの愛嬌が垣間見えてうれしくなった。

「うん、もう大丈夫。心配かけてごめん」

気分は悪くない。

泣いたあとに残る気怠さのようなものが、少し身体に乗っかって
いるだけみたいだ。

「あら、目を覚ましたのね」

おかずをお盆に乗せた母が居間に入ってきた。

「ごめん、いま手伝うから」

「これで最後だからいいのよ。それより、気持ち悪くないの？」

「うん」

度数の高いお酒だったが、それほど量は飲んでいなかったから、
たんに昼の陽気が重なって寝てしまったのだと思う。

心配をかけたのは申し訳なかったが、わたしの昼寝のおかげで、
思いがけず母の作った夕食を食べて帰れることになったのはラッキ
ーだった。献立も、薄味のサラダに白身魚と、春樹でも食べられる
ラインナップだったのでとても助かった。

とりとめのない話をしてしていると時間はあっという間に過ぎるもので、帰りは十時をまわったころになった。

「またいつでも来なさいよ」

帰り際の寂しそうな母の見送りにはいつも、もの悲しくなってしまう。思わず、さつきみた久々の悪夢が胸をよぎる。

「うん、また来るから。じゃあね、おやすみ」

名残惜しそうな母に別れを告げて、長い夜に春樹と手を繋いで入る。外はそぞろ寒い。

「詩織は泊まってきてもよかつたんだよ」

「ありがとう。でもあしたから仕事があるからそうもいかないわ」
ぼつりぼつりと灯る街灯のとび石を、いくつも春樹と一緒にわたっていく。わたしたちは夫婦なのだから、これから先もずっと一緒のはずだ。

「わたし、春樹のこと愛してるわよ」

どうしたの急に、と春樹は立ち止まった。

「どうして止まるの」

にわかにな不安が沸き起こる。

「わたしたち、夫婦なんだから」

息が詰まりかすれ声になる。

「ずっと一緒に歩いて行くんじゃないの？」

春樹の胸に抱きついてぐっと涙を堪える。

「それなのに、どうして止まるのっ」

どうして春樹を責めているんだろう。

空気が冷たくて春樹のおいもわからない。

だけど不安で不安で、ついに涙が溢れてしまう。

「ぼくも愛してるよ」春樹の力強い腕がわたしを包みこむ。

悪いのは、みんなわたしのに。

春樹を愛していないかもしれないのに。

「ずっと一緒だよ」

それなのに、こんなに優しい。

「わたしが春樹を愛していなかったとしても、それでもずっと一緒にいてくれるの？」

わたしは、春樹にとんでもないことをきいてしまった。

でも春樹は、うん、とだけ言って、うなされていた過去の日に退行したわたしを絹のように受けとめた。

それは、しなやかでとても優しかった。

「きょうの春樹は夢のなかと同じことばかりしてるわ」

胸に身体を預けたまま、そっと仰ぎ見ても表情は見えなかったが、春樹はただわたしを抱きしめてくれていた。

深い空にかかる鏡が、わたしたちを映している。

前の日にどんなことがあっても朝がくるとすべてリセットされる、春樹はそんな気持ちのいい性格だ。

「おはよう、詩織」

「おはよう。きのうはごめんね」

短い会話ではあったが、お互いが蟠りのないことを確認するに足りないものではなかった。

水を飲み流しにむかう。

コップに水を汲んでいると、春樹がキッチンにやってきた。

「きのうは本当ごめんね。嫌な夢みたから春樹にあたっちゃって」
銀の水面に口をつけ、それを一気に飲みほした。

「いいんだよ。ぼくだって感傷的になることはあるし、そういうときに支えあうのが夫婦なんだから」

ありがとう、春樹。

「きょうは病院に行くんだったね」

「うん。仕事は午前中だけで、午後は暇をもらったわ」
病院には隔週で水曜日に訪れている。先生は、もつと通う頻度をさげてもまったく問題はない、と言ってくれたが、どうしても状態が気になってしまうのだ。

「まだ、ご両親には伝えてないだろ。せつかく実家に行ったんだから、きのうあたり言ってもよかつたんじゃないかな」

「ええ。でも」

「状態は良好なんだよね」

「うん」

でも、せつかく授かった赤ちゃんなのだから、みんなに喜んでほしい。両親は大喜びしてくれるだろうが、いまの幸に伝えるすべはない。

「やっぱり、このままでは変化がないわよね」春樹を正視する。

「幸くんのこと？」

「うん」

いつか自然に、わたしが姉であると認識するのを待つのが一番だと考えていたが、その判断は誤っていたと思い知らされていた。

「あのね、来月末に東京から新しい人がセンターに来るんだって。その人に相談してみようかな」

わたしが勤めるのは民間のカウンセリングセンターで、とても小さなところだ。だから人が入ってくるなんて滅多にない。

「その人ね、なんでも東京の大学ですつと心理の研究をしてきて、外国まで行って研究の発表をすることもあるだつて。いまも大きなところで働きながら、わたしたちにはとつても理解できないようなすごいことを研究しているそうよ」

「そんな人が来るなんて心強いじゃないか」

そう春樹は言ったが、眼に疑心がみえる。

「どうしたの、春樹」

「いや」

春樹はなにかを言いためらっている。

「隠すなんてよくないわ」

詰め寄ると、言葉を出しづらそうに視線を斜め下に遠ざけた。

「なんていうか、すごい人みたいだけど、小さなセンターに追いやられるなんて、なにか妙なことをした人じゃないかと思ってさ」

べつに詩織の働いているところが悪いっていうんじゃないよ、と終わりに付けくわえた。

「取り越し苦労よ」

その人はいまの仕事を辞めて、わざわざ希望してうちのセンターに来るといふのだ。

この特異な申し入れに、センター長の男だてらに大きな目が、さらに大きく見開かれたかと想像するとおかしくなる。

「だから、ね。こんなチャンスないでしょ」

つつかえるものがなくなつたようなふりをして「その人が来るの

が待ち遠しいね」と春樹は笑顔でリビングにもどっていった。
春樹は変なことに気を揉みすぎだと思つ。

海までの車のなかはとても賑やかだった。

春樹が会社の大きなワゴン車を借りてきてくれたおかげで、大人二人と子供三人、それとビーチパラソルやらバーベキューセットやらのかさばる物も余裕で車に乗れたのだった。

車内には春樹お気に入りのジャズロックが途切れず流れていた。後部座席の幸、隼太くん、沙奈ちゃんは、海までずっとわいわい話をしていた。

春樹は運転をしながら音楽にあわせて節を鼻歌で追い、わたしはそのとなりで、もの珍しいカーナビをいじくって遊んでいた。あのととき道際に茂っていた、青葉の鮮烈な色彩が、いまも胸に残っている。

朝早く出発したのが幸いして、海には午前中のうちに到着した。みんな気持ちが高ぶっていて、長時間の車移動も苦ではなかった。

「ぼくは一度旅館に行つて手続きと荷物おろしをしてくるから、詩織たちは遊んでいいよ」

春樹の言葉に甘えて、わたしたちはひとあし先に浜に降りたつた。「バーベキューするんだから、絶対お昼までにはもどってきてね」砂浜から手を振つたわたしに、春樹は運転席の窓から恰好つけて手をかざし応えた。

「姉ちゃん、泳いで来るね！」

春樹の案で、服のなかに水着を着てきたのは大正解だった。幸たちはもう水着になって準備万端整えている。

「気をつけてね」

幸と隼太くんは元気よく海に向かっていく。

「詩織さんは海に入らないんですか」

「うん。おじさんが来てからにしようと思って。沙奈ちゃんも楽しんでらっしゃい」

沙奈ちゃんは「はい」と言つて二人を追いかけていった。

年ごろだし男の子ふたりと海で遊ぶなんていやかな、と思つていたが、どうやらその心配もないらしくほつと安堵の息をつく。

夏休みの初日で、しかも快晴なのにもかかわらず、この穴場は地元のひとらしき若者たちがまばらにいるだけだ。

ビニールシートに寝ころんで、春樹が来るまでのあいだは日光浴を楽しむと決めた。

これから幸がもっと大きくなつたら、こつやつて遊びにくることもなくなるのだろう。寂しいけど、だからこそ春樹という最高のパートナーが見つかつてよかつた。

この日は、太陽がすごく近くて、パラソルとまぶたを突きぬける炎陽のまぶしさに、目を瞑つていてもめまいがしそうになつた。

日和にうとうとしはじめたころだ。

突然、目の前が闇に覆われる。

「詩織さんっ、大変です！」

陽ざしを遮つたのは血相を変えた沙奈ちゃんだった。

「幸が深みにはまつたんですっ」

それから先はあまり記憶に残つていない。

なにが起きたのか、わけもわからないまま数日間が過ぎて、そのあいだに両親が病院に来たり、幸を助けてくれた青年たちにお礼を言つたり、隼太くと沙奈ちゃんが何度も幸のお見舞いに来てくれたり、いろいろあつたらしい。

幸の意識は二日で回復したのだが、わたしのことも両親のこともなにもかもが思ひだせなかつたのだという。

さいわいにも後遺症が残るような脳の損傷は認められず、記憶喪失も一時的なものだと医者様が言つていたと、あとで聞かされた。入院から二週間が経つころには、幸はすでに完治したといつていい状態にまで回復していた。隼太くんは毎日お見舞いにきてくれて、おかげで幸は暇せずにすんでいた。

本当だつたら受験勉強に専念する大切な時期なのに。因果を辿れ

ばわたしに行きあたる。海に連れていかなければよかったと、ひどく後悔した。

「毎日つきつきりだからだは平気なの？　しーちゃんだったこの前までは目もあてられないありさまだったのよ」

「大丈夫よ、お母さん」

母の顔もやつれていた。

「幸もだいぶ、よくなっただから。無理してはだめよ」

「うん」

もう元気に会話もできているし、そろそろ退院できるそうだと。

「だけど」

わたしのことだけ、記憶に変化が生じていた。

わたしは、この仕事に就いたときにたくさんの本を読んで勉強したことを整理して、考えに考えつくした。

考えぬいたあげく達した結論は、記憶がもどっていく過程で、それを機に記憶の一片を自分の都合のよいものに変化させてしまったというものだ。でも、わたしが恋人になって、幸は何か得をする？　なにも、ない。と、結果、思索は暗礁に乗りあげ、まとまらなかった。だが、まずは幸の退院をと、とりあえずの幸への接し方を両親と春樹に提案したのだった。

「いまは、わたしが姉だという事実を無理矢理に押しつけても理解してもらえないわ」

春樹は、うんうん、と聞いていたが、両親を言いふくめるのには相当の時間がかかった。

「それじゃあ、しーちゃんはあなたのお姉ちゃんよ、って教えてあげられないの？」

「いくらそう言ったところで、幸は納得できないと思うわ。表面はわたしを姉として接していても、胸に納得できない疑問として抱えこむことになるの」

「だからといって、なにもしないわけにもいかないだろう。偉い精神科の先生に診てもらったほうがいいんじゃないのか」

父は語調を強めたが、わたしがなんとかしてあげたかったのだ。
「わたしだつて心理カウンセラーなのよ。それに、全然知らない人になんてまかせられないわ」

幸にあわせて、わたしと幸は恋人だとして接してあげて、とこの考えを発表すると、三人とも予期せぬ提案に驚き、あっけにとられていた。

どうしてそのような記憶の変化が起こったのか、いまははっきりしない。だが、その根本を見いだして解決しないことにはどうしようもないのだ。それまでは幸にありのまま言うのはよしておこう。

両親を説得したあと病室にいくと、幸は笑顔で迎え入れてくれた。

「幸、あした退院できるわよ」

わたしの恋人は、にい、と笑った。

うつぶせていた頭をゆっくり持ちあげると、年のころは四十代半ばかという男性が、チヨークを持つ手をいらいらさせながらこちらを見ていた。

「ごめんなさいという意をこめて、首で一礼する。

ほっそりとした体つきにやけに姿勢のよいその男性教師は、授業態度の悪い生徒の改心を見とどけると、黒板をかえりみて漢文をつらつらと書きはじめた。

静かな教室で打ち鳴らされる軽やかなチヨークの音は、どれほどに優良な生徒をも、眠りやひとり妄想の世界へといざなう不思議の力をもっているものだと言ひころから感じている。窓際の席ならなおのことだ。

校庭に目をやると小雪がちらちらと舞っており、高校入試までの短いタイムリミットを黙示していた。

気が、重い。

十一月の雪に、現実から逃避していた意識がすっかり呼びもどされる。

「なあ、幸。幸」

押し殺してもなお声が野太いのは、うしろの席の橋本だ。

「なに？」

振り向きざまに出した声は、先生の鉄壁の包囲網を掻い潜ろうとおかしいほどにうわずった。

「シャーペン、取って」と橋本が椅子の下を毛深い指で示す。

橋本は三年生になってから急激にひげが濃くなりだし、見た目はとても同じ年と思えない。

「こら、橋本。ちよっかいかけるんじゃない」

また怒られた、と思うや否や橋本が立ちあがる。

「違うんです」

教室内がざわめく。

「なにが違う」

学年主任の性分か、「反発の動きをみせる生徒を、さて、どう更正させてやるうか」という企みを声色に含んでいる。

だが、橋本は悪心でもって楯突いているのではない。

根がまじめな橋本は、どうしてか発言は立つてするものと信じこんでいる。だが、図体が図体だけに、どうしてもふてぶてしい印象を受けがちで、多くの先生は性根を見ぬく前に誤解してしまっている節がある。橋本とは中学に入ってからからのつきあいだが、心根にもつ人のよさを諒察しつくしていた。

今回も、橋本としては慇懃に起立したつもりだろうが、僻目には、生意気に逆らう気だ、としか映っていない。

「落とした鉛筆を取ってもらおうと」

「それで声をかけたか」

「はい」

「自分で取れば済むことだ」

交戦の構えに、ざわめきはいよいよ熱を増した。

「はい。しかし先生」

「なんだ」

「西洋では、落としたものを自分では拾わないのがマナーだそうです」

「はあ」

「修学旅行のとき、ホテルのマナー実習で教わりました」

「それはテーブルマナーだろうが」あまりかねた様子で一笑し、「橋本のそれはフォークかなにかか」と咎めた。

「フォークではありません。ですが、箸を忘れて代わりにしたことはありません」

もはや議論にならないと踏んだようで、「ではそれは箸か」と、おちよくった口加減で追及した。

「いいえ。箸の代わりにしたことは叱られました」

「ということ、それは食器ではないな」

「はい」

「テールマナーとは関係のないものだ」

「はい。すみませんでした」

「拾いなさい」

最後に「だが、いまだき鉛筆を使っているとは感心だ」とまとめに入った言葉に対し、あるうことか橋本は「ああ、すみません。シヤールペンでした」と口走った。

もう授業にならなかった。

最高潮まで沸きたった教室は、先生の一喝で表面上の騒ぎこそ収まりはしたものの、いまとなっては勉強に傾倒する心情になど、もどれるはずもない。

橋本としては、いたって誠実にこの経緯と自分の考えを論じただけだろうが、自分の授業を破綻に陥れられた先生からすれば、ひねくれた悪徒がへりくつを並べたにすぎず、腹の底は煮えたぎっていることだろう。ほんとう橋本は、意を尽くしても誤解されてしまう残念な難点の持ち主である。

かわいそうなことだが、橋本には、このあと呼びだしが待っているかもしれない。ここに至った原因の一端を担っているだけに、かばい立てしなかったのは悪かったな、と思った。

とにかく、本人の罪なき思いに反して、こうもよからぬ結果をうむ要因となっているのは、大柄の背格好と無骨にとられがちな物言いだ。

まず取っつきで、彼との体格差から相手が動物的反射を起こし、身構えてしまう。第一感の印象などは接するうちに拭い去れそうなものだが、こと教職員に限ってはそうとも限らない。まじめ一辺倒がゆえにする、目上に対してのこんこんとした言葉ぶりが、見さげで威圧しているように聞こえるのだろう。

非情な現実だが、その一方、陸上部で培った立派な筋骨は当人にとって大の自慢らしく、少し前までやっていた恋愛ドラマに出てく

る、刑事役の大男に風貌が似ていると、よろこんで自任していた。

そのドラマは詩織もみていて、内容について話をしたことがある。主役が恋人に言っていた『死ぬまでずっと抱きしめていたい』というセリフをぼくはおかしいと考えていて、それをなんの気もなく口にしたのだ。

詩織はそれに対し、ん？ という顔をした。

それって『死ぬまで抱きしめていたい』じゃなくて『死ぬ前にまた抱きしめあえてよかった』とかそういうセリフだったと思う、と詩織に指摘されたのだった。

たしかに、外出するにも、トイレに行くにも、死ぬまで抱きしめられ続けたらたまらないわね、と大笑いする詩織に、ぼくは顔から火が出る思いだった。

女の子と違って恋愛ドラマは集中して見ていないから、と情けない陳弁をすると、そんなことに集中するより受験勉強に集中しなくちゃね、とまたつつこまれたのだった。

こんな恥はさっさと掻き捨てたい。

が、掻き捨てたからといって、さあ受験勉強に集中、というふうにならなく気が向くものでもない。

高校も義務であれば素直に行けたし、その前に高校受験が義務と決まっていれば、あきらめて受験勉強の一つにも取りかかったと思う。

それが半端にも、進路も自由、受験も自由と、無駄な選択肢があるものだから、覚悟を決めてそこに対峙するところまで心をもっていけないのである。

とかく、なにか決定的な動機がぼくには必要で、それが見つからなければ重い腰がなかなか持ちあがらない横着者なのだ。

決まり事ならば、積極的とはいかずとも慣例に付きしたがえたが、自発して物事を発起するのは大儀だ。おのずから、なにかを律して片づけていく甲斐性がまったく欠如しているのだ。

だからといって、ものぐさなわけではない。行為に意味づけや理

由づけをして手を打つのが苦手なだけなのだが、それをものぐさというのなら弁解のしようがない。

しかし、どうせこのままの流れで受験をするのなら、はじめから勉強に力を入れるか、推薦で高校を受けられるように働きかけをしてくればよかったと未練が残る。

周囲には推薦入試を受ける賢哲が多い。

橋本は私立高校をスポーツ推薦で受験するのが決まっっていて、合格の見こみといえば、ほぼ確定だそうだ。

沙奈も、橋本と同じく推薦での受験が決まっっていて、彼女もまたほとんど合格が決まった一人だ。受験するのは県外の進学校。ぼくや隼太とは違って沙奈は頭がいいから、学力推薦は納得できる。二期の期末試験も、学年で上位だった。

頭がいいといえば、詩織も相当頭がいい。

いまだに大学に進学しなかった理由はわからないが、詩織ならばきっと県外の有名な大学にもいけたはずだ。

見かけと実力によらず、勉強がさほど好きではなかったのか。もしくはまわりくどいことは端折って、はやくいまの職に就きたかったのか。

つきあってい長いのに、つまびらかにならないところは数えきれない。

「橋本、次はないぞ」

渋い声にはつと気がもどると、とき同じくしてチャイムの音が激しく耳をついた。

橋本は救われたのか。

焦点が定まらず、はっきりとしない視界のまま、号令にあわせて起立と礼をし、それをきっかけにざわつきだす教室に構わず、おとなしく座って机に横たわる。

ひんやりした机の感触が気持ちいい。

海で溺れてこのかた、事故以前の記憶があいまいになるときがある。

だが、両親に心配をかけるのを避けたかったし、詩織が門違いの自責に苦しみ自暴自棄になってしまふのがなにより恐ろしく、だれにも打ちあけていない。

ぼくが入院して間もないころの詩織は、それまでに見たことのない詩織だった。

頭の中が朦朧とするさなか、自分が彼女を守らなければならないという使命感を覚えていた。彼女がそうなった原因は自分にあるのに、おかしい話だ。

そう思い至るほどまでに、あれほどもろくて、悲しい詩織を見たことがなかったということだ。

いや、遙か前にも一時だけ、そんなときがあった気がする。

たしか小学生になったころ。そう、詩織が小学校を卒業した年か。「幸、眠いの？」

背中を叩かれ、からまわりの境地から安堵の世界に引きもどされる。

「沙奈」

幼馴染みの沙奈、隼太とは一年までは三人とも同じクラスだったが、二年のクラス替えで全員がばらばらになった。以来、こうしてお互いをクラスを行き来するようになったのだ。

たまに、どちらかのクラスにふらふらと訪ねていっては、くだらない話をして帰ってくる。

沙奈とは家が目と鼻の先だが、学校内と登下校以外ではもうほとんど会っていない。

「授業中も寝てて怒られてたのになあ」

うしろからやけた声で橋本が口をだす。

「橋本のほうがもつと怒られてたけど」

なにかしたの、ときく沙奈に橋本は半笑いで「べつに」と言い、

「次、美術室だぞ」話題を転じてささと廊下に出ていった。

「沙奈のクラスも次は音楽だから移動でしょ」

「うん」

机のなかに手をつっこみ、美術の教本をさがす。

「あのさ。幸って、浅岸高を受験するんだよね」

志望校名が浮かばず、わずかに、間があく。

「そう。浅岸高」

瞬間の変調を色に出さないよう、うまく装い、机に注意をもどす。すぐに答えが出なかったのは、寝ぼけていたからではない。

例のごとく、この期におよびながら受験志望校が決定できずにいたからだ。

受験生同士の日常会話で浮かないようにと考えれば、このあたりではオーソドックスな県立の浅岸高校を志望校としておけば間違いはなかったのだ。

「ねえ、幸」

進路が決まっている沙奈がうらやましい。

「幸はもう聞いているかもしれないけど」

「うん」

「隼太、高校には行かないんだって」
えっ。

沙奈に目をむける。

「隼太が高校に行かないって、なんで」

教室の雑音に紛れて、もしかしたら沙奈の言葉を聞き違えでもしたかと思った。

進学しない事実もそれなりの衝撃はあったが、それ以上に、沙奈にだけ腹心を明かしていたことが、親友と思っていたべくにとって
はショックだった。

「隼太ね、中学を卒業したら就職するんだって」

沙奈が中腰になって耳元でささやく。

つまり、この話は人に知られてはまずい秘密ということだ。

秘密？

誰との？

沙奈と隼太だけの？

隼太に口止めされていたのに、沙奈は密告しにきたのだろうか？
一人、親友だと勘違いしていたばくを哀れに思ってた？

「それって、隼太がぼくに伝えるように言ったの？」

もしくは親友同士のへんな照れがあつて、沙奈に言づけを頼んだのかもしれない。

「頼まれてって、そんなわけないじゃない。隼太には内緒だからね」
すんなり密告を認めた昔馴染みは、移動教室を理由にとりのく
ラスへと帰っていった。

沙奈の最後の言葉は、聞きたくない答えだった。

つまるところ、ぼくは二人を一方的に親友だと思っていて、沙奈
はそれに同情していたのだ。

騒がしい教室の音が、遠くへと消えていく。

午前中はほのかに降っていた雪も、下校時間には、すでにやんでいた。

家の近い沙奈とはよく一緒に帰るが、きょうは避けて早く校舎を出てきた。隼太はきょうも部活に参加してから帰るのだろう。ほかの三年生がみんな引退したなか、あいかわらず部活に参加して後輩の面倒をみている偉いやつだ。

三位一体の堅い親友の輪から急に追いだされたようで、どうしても気持ちが悪くない。

橋本たちクラスメートもちろん友達といえたが、隼太と沙奈は特別だった。

隼太とはことに肌が合うものだから、記憶にあるかぎり口争いさえしたことがない。

互いの心は、それこそ互いに心だけで通ずるほどで、声に出して伝えられなくとも、造作なく隼太の考えを筆舌に表せた。

だがそれも思いかえしてみれば過去の話で、最近では隼太の言動がどうも解せないことが多かった。

そう考えると、不調和は知らぬ間に進行していたのかもしれない。ぼくは、もともと人の心を読み解く感覚が鈍いようで、身近な人の心の動きさえもこの眼では見えてこない。

橋本が沙奈に好意をもっている、というのも近くで様子をみていた仲間内には知れた事実だったが、それだって、わざわざこれこれこうだと教えてもらうまで、ぼくだけが知らなかった。

その程度ならまだよかったが、ついに隼太までわからなくなったとなれば、もう手の施しようがないほどの重症だ。

前におじさんが、詩織は人の思っていることがわかる、と言っていた。ぼくの周りには、ぼくの羨望する人ばかりがいるように思えてしまう。

足を止めたのは小さな路地の入り口。抜ければ詩織の家に行ける。詩織の家にも前ほどは通わなくなっていた。

それというのも、心境に不思議な変化があったからだ。なんともいいがたい変化なのだが、詩織を好きじゃなくなったとか、会いに行くのが面倒になったとか単純なものではない。どうしてか、進んで詩織の家に行こうという気そのものが薄らいでいたのだった。

以前から詩織への感情は、恋愛感情というより、すでに家族愛に近いものがあった。

部屋に居すわっていたのも、詩織を思いこがれるあまりその帰りを待っていたのではなく、なんとなくか、帰ってきたときに家族が待っていれればいいだろう、という発想のもの行動であった。いまも揺らいでいないこの感情に反して、詩織を家で待とうとしなくなっていたのだ。

詩織を想う気持ちは変わっていないのに、この身を投じなくなった矛盾が、我が事でありながらわからない。

人間のシンソウシンリを専門にしている人が、知りあいに誰かもう一人でもいてくれたら、こういう詩織関連の相談ごともできたのにと歯がみしてしまう。

考えを巡らせながらも、足は路地に向く。

せめて、隼太との一件だけでも話を聞いてもらえれば気が楽になるだろうと当てこんでのことだ。

歩み入る道は裏通りらしく、腕を広げて歩けば両側壁に手がこすれるほどに狭い。枯れ草の散らかった地面は舗装もされておらず、雨や雪のあがりには水たまりがあちらこちらにできる。

窮屈な裏道を駆け、ほどなく大きな通りに出る。

あとは正面の広い車道をわたり、一分も歩けば到着する。

横断歩道を駆け足で横断し、家の敷地に一步踏み入れたところで玄関の戸が開いた。

出てきたのは詩織だ。

「あ、幸」

「どこかに行くの」

詩織に会いにきても、こんなのはしょっちゅうだ。

「また映画とか？」

「うん、ごめんね。約束しちゃってるのよ。五時には帰って来ると思っから家にあがって待っててくれる？」

詩織は隠しているが、本当はいつも女友達に会っているのではない。嘘をついているのだ。

「んーん。帰る」

詩織は困った顔をした。

「ごめんね、と詩織はもう一度言ったが、なにも言わずにその場を立ち去った。

どうしてこんなにいやな行動をとってしまったのか、自分自身わからなかった。

意識して遠回りをしてきたせいで、家に着いたのは夕暮れどきになつてからであつた。

日中に地肌を濡らした雪も完全に土に吸収されたか、空に還つた。降る時季が早すぎたのだらう。タイミングや判断を誤ると、なんでもこつなつてしまふ。

名状しがたいむさくさとした気分で、うつむき気味に歩を進めていたが、家まであと数メートルのところ、表口に誰かが立っているのに気づいた。

「おつ、幸」

一瞬した夕影は、普段であればまだ学校にいるはずの隼太であつた。

「隼太。部活は」

「グラウンドぬかるんでるし、たまには早めに切りあげて幸と遊ぼうと思つてさ。幸もいま帰りだったんだ。ちょうどよかった」

そんな喜色を向けていても、胸裏ではぼくを信頼できる友人としてみてくれていなかったのだと思うとやるせない。

「そう」

抑揚なく発した言葉に、隼太は相好をあらため、首をかしげた。

「なんか元気ないんじゃないか」

そんなことない、と無愛想に言つて玄関の戸を開ける。

遊びにきた隼太も当然入ってくるものと思ひ、戸を開けたまま靴を脱いでなかに入つたが、うしろからは物音ひとつ聞こえてこない。

「隼太？」

振り向くと、隼太はさっきのままぼんやりと玄関前に立っている。

「入るんじゃないの？」

耳に障るように言つた。

「幸、怒つてる？」

怒ってる？

そうだ。言われてみてようやく怒っていたことに気がついた。

隼太はなんでも話してくれる親友だと思っていた。でもそれは、ぼくの独り決めでしかなかった。そこはぼくが悪い。でも、そんな思わせぶりにいままでつきあってきたのは、隼太が悪い。

「おれ、幸になにかした？」

愁いに沈んだ隼太はまたぼくにきいた。

「隼太は、高校に行かないんだ」

隼太は一瞬驚いた顔をして、今度はすぐにも泣きそうな顔つきになった。

「聞いたんだ」くちびるが小刻みに震えている。

「誰に聞いたんだ？」

誰に？ 決まってるだろ。

「隼太がぼくよりも信賴している人だよ！」

興奮して涙が出そうになったが必死にこらえ声を震わせた。

「言わなくて、ごめん」

隼太は下唇を噛む。

雫を溢さないように開かれた隼太の大きな眼からは、それでも夕色を放射する粒が頬に筋をつくり流れた。

薄暮独特の色合いと斜光の眩しさに網膜が麻痺して、頭がうまくまわらない。

隼太はまだなにか言おうと口を開いたが、一方的に戸を閉ざした。磨りガラスにはしばらく影が写っていたが、隼太はなにもせずそこにいただけだった。

やがてあたりは暗くなり、影も見えなくなり、むかしの家の玄関に明かりが灯ったのが、ガラス越しにわかった。

うしろの方から母さんの足音が聞こえる。

見つかる前に急いで自分の部屋に駆けこみ、電気についていない部屋の戸を閉める。

完全な闇になったところで、涙が溢れてきた。

机のひきだしには、隼太と一緒に用意していた詩織への誕生日プレゼントが入っている。誕生日に渡そうとこっそり準備していたものだ。

まだ完成していないのに、たぶんこれ以上進行しないのだろうと思うと、また涙が出てきた。

庭の常磐木に、精悍な容姿の野鳥を見つけたのは忙しい朝のことだ。仕事に行く準備をしているとき、二階の窓から凜と張った眼光に射られたのだった。

「春樹来て」声をあげる。

春樹はあくまで自分のペースを乱さなかったが、それでも彼なりの早足で駆けつけてくれた。

「ハヤブサに似ているけど、それにしても小さいな。なんて鳥だろう」

春樹は眼を澄ました。

「ねえ、木に留まっているのあの一羽だけかな」

「どうだろうね。ほかは見えないな」

寒いのか、あの鳥は同じ枝の上ですつと立ちすくんでいる。

もうお互い出勤の時間が間近に迫っていたため、庭に出て下から見てみようか、という春樹のせつかくの案は却下せざるを得なかった。

「帰ってくるころにはいなくなってるわね」

肩を並べて見入っていた春樹は、そうかもね、と残念そうに応えた。

「今日は遅いんだったかな」

春樹の声に、鳥に奪われた眼は部屋に舞いもどされた。

「ええ。きょうから来る方の歓迎会があるから」

「例の人だね」

「うん」

もう十一月も終わる。

この四か月間、何の変化も表れなかった幸になにか策を講じてくれるはずと期待していた。

幸くんはよくなるよ、と春樹が言つと、わたしも、きつと風向き

はよくなるはずと信じて疑わなかった。

当初は素性のみえない相手を訝しがっていた春樹だったが、わたしがあまりにも、タダモノじゃないわ、とか、絶対に博覧強記の碩才よ、とか想像を膨らませるものだから、ついには軽度の暗示のよくなものにかかってしまったようで、顔さえ知れない学者の熱心な信奉者と化していた。

当然、布教師のわたしも、きょうを心待ちにしていた。

シャコバサボテンへの、いつてきます、の挨拶にもいよいよ気持ちが届く。

「帰ったらどんな人だったか話すわ。春樹も楽しみにしてて」

「うん、待ってるよ」

春樹とは家を出るまでは一緒だが、歩きだす方向は全くの真逆だ。

「またね、春樹」

「うん。夜に」

春樹もわたしも遠出でなければ歩きに徹する。通勤もその例外ではない。これは春樹から出た妙案で、使わない足腰はすぐ弱まるから、という理屈だ。

わたしとの身体的な年齢差をこれ以上広げないようにとの考えが根本にあったらしい。

春樹はやたらと年にこだわる。

年が開いていても、わたしはまったく気にしないのに。

朝礼はセンター長にむかってわたしたち六人のスタッフが扇形に並び、朝の挨拶からはじまる。

続くセンター長の恭しい紹介の言葉に、彼の横で待っていたそびやかな男性は無表情のまま深々と一礼した。

「榎波と申します。よろしく申し上げます」
同僚の女性たちから小さな歓声があがる。

持ちあげた芳顔は雪よりも白く、そこから一筋に繋がる細腕の先には、女性のようになやかな指がすらりと伸びていたのだ。

続いてセンター長は、彼が来ることになった経緯を話しはじめた。
「詩織さん、どう思う」

となりから話しかけてくる彼女はセンター一の雄弁家で、その弁舌たるやまさに懸河の流れという、咄家も真つ青の演説つかいだ。
朝礼の耳語が三度の飯より好きというのだから、それこそ筋金入りである。

「どつて？」

しかしながら、ついひそひそ話に乗ってしまうのは、少なからずわたしにもその素質があるということなのだろう。

「すっごい美顔よね。センター長なんて同じ男とは思えないわ」

そこまで言われてしまったら、センター長も男として立つ瀬がないだろうと気の毒になる。

「あたし本気でアプローチしちゃおうかしら」

「本気？ もう結婚してそうだし、それに年が離れてるんじゃない？」

バツイチの彼女は四十なかばだが、榎波という男性は三十歳くらいにみえる。

しかし彼女は、指を立てて、大丈夫、とウィンクする。

「調べによるとね、独身のうえにあれでも今年四十らしいのよ」

彼女はいつそう顔を近づけて声を細めた。

「うそ、四十？」

春樹と同一年で、彼より若くみえる人なんてはじめてだ。

「それにあなた年の差でとやかくや言えた立場だったかしらね」彼女はくすりとし、それもそうだったわ、とわたしは舌をだした。

「皆さん、おしゃべりもいいですが、ここからは重要ですからよく聞いてくださいね」

突如大きくなったセンター長の声に、聴音の遠近感が通常にもどされる。

「榎波くんの職務についてですが、カウンセリングは基本行いません。我々のアドバイザーとして働いてもらうことになっています」

彼に意見を仰ぐ場合はクライアントのプライバシーをよく考慮し、最低限のアドバイスのみをいたたくように、とセンター長がまとめると、一人の同僚が手を挙げた。

「榎波さんは、わたしたちの個人的な相談にも乗ってくださいるのでしょうか」

歌うような嬌声できいた彼女をセンター長が叱責するより早く、喜んで、と微量の笑みを含んだ榎波は答えた。これにはまた女性陣が沸き、となりの彼女は手拍子まで打って熱狂した。

こうして突然舞いこんだ華のおかげで朝礼は大いに盛りあがった。「詩織さんは実際のところどんな印象だった？」

弄舌家、兼カウンセラーの彼女はデスクもとなりだ。

「どんなって、二枚目だけど、ちよつと金仏そうじゃない」

「そこがいいのよ」

彼女は両腕で頬杖をついた。

場末に来たのはおちついて結婚相手を探すためだ、とか、こんなセンター丸ごと自分の物にできるくらいの私財と技量を持ちあわせている、とか、彼女は言いたい放題の憶測を語るだけ語って、午前の部がはじまる九時の三分前になると、デスクルームをつうとを出ていった。

世にもまれな弁士兼カウンセラーの正体は、興信所の女探偵だったようだ。

きょうはほとんどがデスクワークで、午前の部と午後の部でカウンセリングをしたのは一人ずつだった。

午前の人は、カウンセリングを受けはじめてもう半年経つ女性で、すっかり元気を取りもどした彼女とはきょうで最後だった。

午後に来た女性とはカウンセリングをはじめてまだ間もない。

踏切で電車待ちをしているとき、線路に飛びだしたい衝動

駆られる。

家でガラスのカップを持っていると、なんでもないので壁にむかって投げつけそうになる。

してはいけないわかってはいるからやらないけど、いつ理性が衝動に負けてしまうかと思うと恐ろしい。

彼女は必死に説明した。

訴える一言一句が切実で、彼女の嗚咽がいまも耳に残っている。わたしが担当する相手は大抵が同年代の女性だが、彼女はわたしより二十以上も年が上だった。たまにこのくらい上の女性を担当することもあって、相談の多くはなにかと子供のことがかかわってくる。

それゆえ、新しくカウンセリングをはじめるとき、最初に心配になるのが、女性としての情動の同調が素直に受けいれてもらえるかどうかというところだ。「同じ女性として、あなたがどうしてそのような気持ちになって、そのような行動をとってしまったのかわたしも理解できます」と、そんなことを言うと、それに対して「年下で子育ての経験がないのあなたにわかるわけがない」と突きかえされてしまうことがあるのだ。

何度かそういった拒絶を味わっていたから、年上の女性と対面す

る場面では余計に気をつかってしまう。

懸念に違い、きょうの女性からは拒絶されることがなかった。

おかげで、夕方から近くの居酒屋の座敷で行われた榎波の歓迎会には、少し気持ちに余裕をもって参加することができた。

そこでも榎波は品位備わる人格者で、女性の同僚たちに囲まれていても、浮かれる様子は一切みあたらなかった。

「それで、幸くんのは切りだせなかったんだ」

春樹はとなりのベッドに腰かけた。わたしは自分のベッドに潜ったまま、毛布から顔だけ出して春樹に言った。

「切りだすものにも、一度も言葉を交わさなかったわ」

それどころか、目さえ一度もあわなかった。

「榎波さんは、詩織の苦手なタイプの人だったのかな」

「そうでもないけど」

「そうでもないけど、春樹の指摘がまったくの見当はずれというところででもない。」

「いいわ。あしたにでも声をかけてみる」

「そうだね」

アルコールがからだ中をぐるぐる巡り、いつしか春樹が見えなくなっていた。

明くる朝は、驚くべき出来事がふたつもあった。

まずは、庭の木の、きのうと同じこずえにあの鳥がまだ留まっていたことだ。

「あの鳥まだ動かないわ。あそこで、立ったまま死んじゃってるんじゃないわよね」

「いや。きのうと同じ枝にいるけど、微妙に位置が変わってるように見えるよ。昼間は活動して朝はあの場所にもどってるんじゃないかな」

あそこがお気にいりなのかもね、と春樹は言ったが、冷たい朝風にも微動だにしないなんて、やはり気がかりでならなかった。

昔、幸が玄関先でポーズを決めたカマキリを見つけたことがあった。幸はまだ小学校にも入学していないころだったと記憶している。あくる日も、またあくる日も、まだいる、まだいると言って幸は大喜びしていたが、数日たっても、カマキリは鎌を振りあげたまま延々と幸を歓喜させていた。

そのうち幸もそれがどういうことなのか子供心に悟ったらしく、知った晩は部屋にこもってひっそりと泣いていた。

そんなことを思いだしたものだから余計にこの鳥が心配になった。

「ほら、首を動かしたよ」

「え」

春樹の呼びかけで外に視線をもどすと、小さなからだはそのままに、たしかに首だけがきよろきよろと動いていた。

「生きていてよかったわ」

「よかったね」

のんびりそんな話をしていると、ふたつ目の驚くべきことがやってきた。

この時間帯に珍しく玄関のチャイムが鳴ったのだ。

「わたしが出るわ」

二階から駆けおりていくあいだに、チャイムがもう一度鳴ることはなかった。

サンダル履きで急いで玄関の扉を開けると、そこには意外な人が立っていた。

「詩織さん、おはようございます」

さらに驚いたのは、そこにいた人物よりも、この彼からはとても想像できないような暗澹たる震え声だ。

「どちら様かな」

二階から春樹もおりてきた。

「あ、春樹はいいの。リビングに行つてて」

春樹は廊下から会釈をしてリビングに入つていった。

「どうしたの、隼太くん」

これほど元気のない姿を見るのは初めてだ。

「朝からすみません」

「大丈夫よ。なにかあったの」

「はい」

「どうしたのかな」

「あの、きょうも学校のあとに相談したいことがあるんです」

「それで学校に行く前にわざわざ来てくれたのね」

隼太くんからはじめて相談を受けたのは、ひと月くらい前だ。それ以来、何回かにわたって話を聞き進めている。

「うん。きょうは早くあがれるから、隼太くんが学校帰りに寄ってくれるまでには家にいるようにするね」

隼太くんは、ありがとうございますっ、と頭をさげて走り去っていった。

このあいだは産婦人科帰りの道端でばったり出会い、近くの喫茶店で短い時間話を聞いた。今回は約束まで取りつけて話をしたいというくらいだし、きつとそのときよりも、もっと深刻な事柄であるに違いない。

「隼太くんだったね、どうしたの」

春樹はリビングソファで新聞を畳みながら言った。もうそろそろ、わたしたちも出発しなければならぬ時間だ。

「近頃よく相談にのってあげてるって言ったじゃない」

「うん」

「でね、きょうもお願ひしますって。なんだか切迫した表情をしていたから心配だわ」

「そろそろ進路も決定しなければいけないからじゃないかな。子供だって深刻な顔くらいするものだよ」

「ううん、きつと違うことなの」

わたしには、隼太くんがあれだけ悩む理由がどんなことなのか、思いあたるところがあった。

「わたし、最近隼太くんと話す機会が多くなったじゃない」

「そうだね」

「それで、なんとなくなんだけど、隼太くんの様子とか見ててね、もしかして、って思ったことがあるの」

春樹はこぶしを頭にやって考えるような身ぶりをした。

「断言はできないけどね、隼太くん、幸のことが好きなんじゃないかなって思うの」

当然、知ってるよ、と春樹は笑った。

「違うの。好きっていうのは、ほかの友達よりもクラスの女の子とかよりも好きっていう意味でね」

そこまで言いかけると、春樹はぴんときた顔をして、ありありと肩を落とした。

「まあ、女の子はそういうことを想像するのが好きだからね」

春樹はそのまま出掛けの準備を再開しようとする。

「ちよつと、春樹」

春樹ったらまったくの誤解だ。心外はなはだしい。

わたしがいたいけな少年ふたりをつかまえて、自分勝手な妄想の種にしていると、そう思っているんだ。

「わたしは隼太くんを本気で気にかけてて、それでだんだんと、そういう気持ちが増えてきたのよ。独りよがりの思いこみなんかじゃないわ」

春樹は言わせも立てず、はいはい、とわたしをあしらうと、さっさとリビングから出ていってしまった。

春樹も幸もこういうことに鈍感だから、隼太くんの気持ちが全然わからないんだわ。

玄関で春樹に追いついたが、顔を合わせないように横をむいて靴に足を入れた。それでも春樹は動じることなく、もうわかったから、と手のひらをわたしの頭に乗せた。

「もう」

頭に置かれた大きな手をむんずと取り、表に出た。

思いも寄らないことというのは、重ねて起こるものなのだろうか。このところの肌寒さが嘘のように陽が差し、たまには、とセンターの裏庭で昼食をとっていたときだ。

となりの一人掛けベンチに座って、わたしよりも口が動いているのにお弁当はいつこうに減らない彼女が唐突におとなしくなったのだ。

「どうしたの」

彼女は下をむいておしとやかに箸をすすめている。

「詩織さん、前、前」

小声に促され前方を見ると、遠目に榎波の姿があった。

「やだ、それで憤ましかかになったのね」

「ちよつと、へんなこと言わないでよ。榎波さんこつちにむかってくるわよ」

もう一度見てみると、なるほどこちらにむかって歩いてくる。

上品な目鼻立ちに、細高の身軀。女性に一目置かれるための要件は満たしている。

「だいたい、ほんとうに未婚なの？」

「たしかよ。きのうの飲み会で本人に確認したもの」

やはり彼女はぬかりがない。

「どうしよう、とても見られたおかずじゃないのに。榎波さんの目に入ったら、料理のできない女だって嫌われてしまうわ」

「どうせ、ここにはこないで、どこか行っちゃうわよ」

「わからないじゃない。あれでもここでは新人なんだから、お昼に交流を深めようっていうのも考えられない話じゃないわ」

まさかと思っただが、榎波はわたしたちの座る前で立ち止まった。

「お食事中に失礼します」

丁寧な紳士は、立て膝をして薄い笑みを浮かべた。

「榎波さん、どうされたんですか」

彼女はさりげなく弁当にふたをし、喜びを満面に広げた。

こういうときの女性は、常識の度合を遙かに凌駕した期待に胸を熱くするのだ。

「ええ、じつはとなりのお嬢さんと少しお話がしたかったもので」

榎波は悪意なくほほ笑みかけたが、それによって彼女は儂い期待は打ち破られてしまった。

それにしても、となりのお嬢さん、といえはわたししかない。

「あらら、ごめんなさい。気がつきませんで」

分別らしく言った彼女は、極めて迅速にお弁当を片づけた。気になさらずいらつしゃってください、と榎波は言ったが、よくわからないことを言いながら、ことさら会釈をしてそそくさとこの場から退散した。

「すみません、ご友人とのお食事に水を差してしまいましたね」

まったくだ。いったい彼女にどう思われてしまったことか。

榎波の突飛なふるまいのおかげで、わたしはきつとこのあと彼女の尋問に幾時か耐えなければならなくなったのだ。

「わたしになにかご用でしょうか」

歓迎会の様子からは、とてもわたしが気になっているようには思えなかった。しかし、わざとそぶりに表さなかったとも考えられる。そうとなれば一刻も早くわたしが既婚者である旨を伝えなければなるまい。

「日高詩織さんですね」

日高、というのはわたしの旧姓だ。

「あの」

どうしてこの人がわたしを日高と呼ぶのかわからず惚けてしまった。

「ええと」弁当を置いて起立したわたしにワントンポ遅れて、榎波もゆっくりと立ちあがった。

「結婚していまは相沢詩織といいます。榎波さんはわたしをご存じ

だったのですか」

榎波は半握りの手の甲を口にやって、喉で咳払いをした。

「あなたのことも、あなたのご両親のことも、よく存じ上げております」

「父か母のお知りあいですか」

榎波は言いしるぶるように一拍おいた。

「そうですね。私はあなたのお母様の弟なのです」

お母さんの、弟。

母に兄弟がいたというのは初耳だ。何度か母の実家に行ったことがあったが、そこで榎波に会ったことなど一度もなかった。

「疑わしい、という顔をされていますが、そんなに警戒なさらないでください。私はあなたのお叔父にあたる、ごく近い親戚なのです」

「いえ、疑わしいなんて、そんなこと思っていないません」

「嘘はいけませんね」

凶星だ。すっかり見すかされてしまっている。

榎波の眼は、わたしの疑心を知りながらも、その程度のこと心にまったくかからない、と言いたげにもみえる。

榎波はまた口を開いた。

「本日は、午後からのお仕事はお忙しいのでしょうか」

「午後、ですか」

「ええ。ご帰宅前に少しだけお時間をいただきたいのですが、いかがでしょうか」

「ええと、あの。午後はデスクワークだけなので早くあがらせてもらいますが、帰ったあとに予定があるので、すみませんが」

「いま、おっしゃったことは本当ですね」榎波は口元だけで笑った。

この人は、ひとの考えていることがわかるのだろうか。

不審がいつそう募る。

「そうそう」

榎波は胸のポケットから親指大の青い包みを取り出した。

「もしかしたら喜ばれるのでは、と思ひまして」

差しだされたのは半球の粒。青い銀紙の包みには、円の縁に沿って外国語が書かれていた。

「先ごろ海をわたる用事がありました、そのお土産です。甘いだけの菓子ですが、どうぞお召しあがりください」

受けとった手元に視線を落とす。

「詩織さん。後日あらためて、おちついた場所でお話ししよう」
それだけ言うと、榎波は革靴を鳴らして裏庭を出ていった。

はじめて話したが、やはりあまり好きになれそうなタイプではない。勉強し過ぎるとあんな風になってしまうのだろうか。

深く息を吸って、お弁当を手に取り、ベンチに座る。

そうだ、心証のよくない人、とかそれどころではない。

感情に走らず冷静に考えてみると、榎波の話は腑に落ちないところがあるのだ。

榎波は、母の弟だ、と主張したが母の本姓は榎波ではない。結婚して婿入りしたとしても、それでは独身だという話が偽りになる。

嘘をついているのは、母との間柄か、それとも婚姻の事実か。そのどちらだったとしても、人をだまそうというのだから信頼できる人物には思えない。

それに、センター長をはじめ同僚の多くがわたしを名字で呼んでいるなか、あえて旧姓を持ちだしたのも、遠回しに縁故を信用させるためだったのかと想着て、なおのこと心証が悪い。

幸のことを相談するのは待ったほうがいいだろう。

仕事が終わったら、電話で母に榎波のことをきいてみなければ。

うん、と心決めをしてもどった事務室では、案の定、彼女からの嫉妬深い質問攻めの嵐だった。

叔父だと言うと、どうしていままで教えなかったのかと非難され、知らなかったと言っても、そんなのは普通に考えておかしいと否定され、あげく、つきあっているんじゃないか、という憶測にまで火がついた。

午後の部に彼女が担当するカウンセリングが入っていないかつたとしたら、きつといまごろも、仕事の手につかないほど容赦のない糾問が続いていたに違いない。

そう思うと身の毛がよだつ。

これでは春樹に『女は妄想の権化』と思われても仕方がない。

榎波の奇行と、そのせいで燃えあがった彼女が頭から離れず、わたされた青い包みなどすっかり忘れていた。帰路についてしばらくセンターから離れた路上でやっと思ひだし、かばんから取り出したのだった。

手に取り心して鼻にあてると、あまり嗅いだことのない一種独特の甘い匂いがした。

注意深く銀紙をはがしてみれば、中身はなんのことはない貝殻をかたどった、ただのチョコレートであった。

榎波の目的がいよいよ理解できない。

ともあれ、いまは隼太くんのために気を集中させなければならぬ。彼の生涯を左右するかもしれない、大事な相談をされないと制限らないのだから。

幸と隼太くんの案件、担った重責は計り知れない。

行く先には一抹ならず不安を感じるのが実際だが、わたしはもう覚悟を決めていた。

胸に強く意気を込め、景気づけに口にほったチョコレートは、サブロウに似た味をしていて、とてもおいしかった。

先日の一件以後、隼太、沙奈とはひとつも言葉を交わしていない。校内外で行き会わないよう、神経をとがらせ避けてきたからだ。

まだ数日の経過だったが、ずいぶん話をしていない気がする。

なだらかだった世界に、ぼくはみずからそっぽをむいてしまったのだ。

ひとり下校する道のはしには、折あしく昼すぎに降りだした雪がはいつくばるように積もりはじめている。もうしばらくしたら除雪車も動きだすのだろう。

それにしても寒い。吐きだした白い息が、北下ろしにさらわれて後方に押し流される。凍て空から降る小米雪は、そのほとんどがアスファルトに滲みて消えていく。

外を歩くには気の乗らない空合の日に、わざわざ詩織の家に行くというのには事情があった。

昨晚、詩織から電話があって、早いうちにしておきたい話があると言われたのだ。うちに電話をかけてくるくらいだから、よほどのことだろうと思い、天候の悪条件もかえりみず彼女を訪ねることにしたのだった。

秋口には通いつめていた道筋も、足裏が感触が忘れるほど遠のいていた。ひとところよく独り歩きした大通りをわたったところで、家の前に見ない自動車が止まっていたことに気づく。

車体の黒光りがいかにも高級そうで、近づいて中を覗いてみるとハンドルが歩道側の座席についているのがわかった。

車両の雰囲気から当て推量するに、乗り主はおじさんの知りあいか、あるいは仕事で交わりのある人だろう。少なくとも、訪問業者や詩織がらみの客でないのはあきらかだ。

おじさんもきょうは早く帰宅し、いまはその人となにかおとな同士の話でもしているのだろう。

立ち入ってよいものか躊躇したが、詩織の話というのも気になるところだし、とりあえずあがらせてもらうことにした。

もし先にきた訪問者がおじさんの古い友人で、昔話に花が咲いているとか、そうではなくとも大切な仕事の話をしているとかいうのなら、二階の部屋で待たせてもらえばいい、と考えた。

チャイムを押ししてからほどなくおじさんが出てくる。おじさんは驚いたような色をみせたが、すぐに優しい面もちにもどった。

「やあ、幸くんよく来てくれたね」

玄関に詩織の靴はなく、かわりに見慣れない革靴が几帳面に揃えられていた。

「おじさん、こんにちは。二階で詩織を待たせてもらってもいい？」

「そう。詩織に用事があったて来てくれたんだね」

「お客さんが来てるのにごめんなさい」

「いや、そのお客さんだけだね。じつは、幸くんに会いたがっているんだけど、どうかな」

「思いも寄らないことだ。ぼくに会いたいだなんて、いったい誰なのだろう。」

「幸くんのお母さんの弟さんだよ。幸くんからしたら、叔父さんになるね」

誘導されリビングに入ると、見知らぬ成人男性がソファから立ちあがり、ぼくを見て一礼した。

「こんにちは幸くん。はじめまして、榎波です。まさか本日お目にかかれるとは思っておりませんでしたから、とてもうれしいです」

中学生相手に敬語を使うなんて変わった人だ。

「このかたは仕事が忙しくて、親族の集まりにもあまり顔を出せないそうなんだ。だから幸くんと会うのは、はじめてなんだよ」とおじさんは丁寧に解説した。

整った装いからも、周囲に漂う品格からも、この榎波さんという人がぼくと近い関係にあるなんて、なかなか信じがたい。なぜなら、両親のいずれからも、この人に似寄った高貴の質が感じられない

いからである。

「ちよつと、二人で話していてくれるかな」

おじさんは、ぼくをソファーに座らせてリビングを出ていこうとこちらに背をむけた。

「えっ、でも。話なんてなにをしたらいいの？」

困惑するぼくに榎波さんは、人差し指を自分の口元にやりながら、小さく、しい、と言った。

おじさんは一瞬戸惑ったそぶりをみせたが、振りかえらずに部屋を出ていってしまった。

「春樹さんは私のつまらない話に長々ときあってくださいまして、ですが本当はお仕事をされたいようなので、ここは幸くんが話相手をひきついでくださいませんか？」

そんなことを言われても、これほど年の離れた知らない人との会話など、どうしたらよいのか。

「あの、榎波さん」

「叔父さん、と呼んでください」上品にみせる白い歯が清潔的だ。

「ぼくの叔父さんがどうしてこの家にいるんですか」

「偶然、詩織さんが働いていらっしゃる職場に転勤してきましたね。それで、春樹さんが私のような者と話してみたいとおしゃってくださったので、お伺いしていたのです」

ですが、突然伺ってしまったのでやはり少々ご迷惑だったようです、と少し苦そうに笑った。

とても穏健そうな物腰はおじさんに似ている。西欧の貴紳をまるのまま血だけを和様に入れかえたような立ち居は、ぼくの思う、憧れの大人像、をまさしく具現している。

「幸くんは私によい印象をもってくださいましたようですね」

「あつ、はい」

ぼくも隼太同様に心の内が顔に出やすい体質なのだろうか。感づかれるほどとは、はたしてどんな目つきで叔父さんを眺めまわしていたのか、想像すると小恥ずかしくなる。

「幸くんは、詩織さんとつきあってらっしゃるのでしたね」

「ええ、はい」

「つきあって長いのですか」

「はい。もう、ずっとです」

もっとお堅い人かと思えば、恋愛話を投じるなんて意外だ。

「詩織さんはかわいらしいですからね」

もしかして、叔父さんは詩織に興味があるのだろうか。どれだけ品格があっても、心腹に邪を秘めていないとはかぎらない。

「あ、幸くん。私はお相手がいるかたと交際したいなどは思いま
せんで安心してください。私と幸くんとは、なにぶん年に開き
がありますから、このような話題しか浮かばなかっただけなのです」
「ああ、はい。わかりました」

うすっぺらい面の皮を剥がれたはむしろこちらで、軽率な発想で
もって誤解してしまったことを申し訳なく思った。

「幸くんは詩織さんと結婚しようと思っていらっしゃるのですか」

「はい。ぼくが二十歳になったら結婚したいと思ってます」

「そのころには詩織さんも二十代の後半になっていますが、それで
もよろしいのですか」

「年は関係ありません。ぼくは詩織が幸せになってくれるだけでい
いと思っています」

叔父さんは、そうですね、彼女も年のことは気にしそうもありま
せんし、と言い、密やかに冷笑してみえたが、気のせいだった。

「詩織さんは、職場でも大変活躍されていらっしゃいますし、とて
も頭の切れるかたで、そのような女性と交際できて幸くんはお幸せ
ですね」

そうだ。詩織と同じ職場ということは、叔父さんも心理カウンセ
ラーなのであろうか。もしそうなら、詩織に言えないことを相談で
きないだろうか。

「幸くん。私は長年ヒトの心の奥底を勉強してきました。だから、
もしなにか私が役立てるようなお悩みをおもちでしたら、話をお聞

かせ願えないでしょうか」

じつに、間がいい。

「知り合いにそういうことに詳しい人がいればよかつたのにと思っていたんです。相談を受けてもらえるなら助かります」

叔父さんは、どんなことでしょうか、とほほ笑んだ。

なまじ人心を交わして親交を結んだあとより、先入の観がないま話をきいてもらえればこれ以上のことはない、と思うのだが、反面会ったばかりの人に話すようなことかと、ひねくつた疑念もまた伏在する。

ほんの逡巡で舌を引いたそのとき、窓ぎわの庭木の枝から雪の固まりが垂つたのが見えた。

「本日はあいにくの悪天候でしたね」叔父さんは腕時計を見て立ちあがった。

「あまり長居をして、幸くんの帰りが遅くなってしまつては申し訳が立ちません」

「いえ、ぼくは」

と、叔父さんは紙片を差し出した。

「この名刺にある番号に、いつでもお電話ください」

「電話をかけてもいいんですか」起立し、名刺を受けとる。

「幸くんの相談役でしたら、いつでも私が買って出ましょう」

「ありがとうございます。あの」

厚意のあふれる白面が心憎い。

「うちに寄つて母さんに会つていくんですか」

「そうですね。幸くんの自宅にはまた日をあらためてまいりますよ」

叔父さんはジェントルを貫徹した。

子供相手にさえ折目正しい語り口が珍妙にも感じられたが、だからこそその表裏なき質朴さがより信頼を深くした。

詩織の帰宅は叔父さんの出発からまもなくのことで、それまでぼくはリビングにもどってきたおじさんと話をしていた。

「詩織、おかえり。幸くんが来てくれたよ」

詩織はぼうつとしてリビングの入口に佇立した。

「幸が、こんなに楽しそうに　お父さんと話をしてるなんて、驚いたわ」

むつまやかな空気に茫然としているようであった。

おじさんとは談話する機会こそ少ないが、だから会話のしづらいあいだからというわけでもなかった。しかしながら、こうした場面を詩織が目の当たりにするのはわりになかったから、多少驚いたのにはうなずけた。

おじさんは詩織のもとに近づき、両手の買物袋を代わりにひきつけた。

「さっきまで榎波さんが来てくださっていてね、幸くんとは彼の話をしていただよ」

たちまち詩織の眉が曇る。

「彼にもう、その、話をしたの？」

詩織はおじさんに小声でなにか言いはじめた。

一方的に舌をまわす詩織の言葉を、おじさんはすまなそうな顔で聞いている。

「もう、彼のことは言っておいたのに。勝手に家に呼んでそういうこと頼まないでよね」

姿態に怒りをにじませ、リビングを出ていった。

「おじさん？」

「なんでもないよ」きまり悪そうに笑う。

「幸くんは詩織に用事があるんだったね。着替えたらもどってくるだろうから、ここで待っていてくれるかな」

うす曇りの天気で暗くなりつつある室内に照明の明かりをつけ、おじさんもリビングを出ていった。

すぐにもどった詩織はうってかわり悠揚としており、これはきつと、業をひとまず差し置いて接してくれようとしているのだな、と予想できた。半周りはかり年嵩なだけで、こつも心神が成熟している詩織を見ると、比較した自分の肝がいかにか幼く未熟だったのか身にしみて感じられた。

「幸、榎波っていう人とどんな話をしてたの？」

キッチンで水を一杯飲んでリビングにふたたび入ってきた。

詩織は、叔父さんを勝手に招き入れたことに怒っていたようだったが、職場ではふたり仲が悪いのだろうか。

むろん、それをきいてはまた機嫌を損ねるのがオチだろうと、みずから話題にあげるのは避けねばと心した。

「なんでもないよ。詩織とのことか話しただけ」

詩織はソファーに對座した。

「いい、幸。あまりあの人になんでもかんでも話しちゃダメよ」

「どうして。いい人そうだったのに」

「わたしはあまり好きじゃないわ」目を離さずに言った。

以前おじさんが言っていたように、ぼくよりも詩織は人の内面を見定める力があるのかもしれない。だが人間、完璧などない。

悪人がひとに無償で手を差しのべるものだろうか。詩織は知らないが、叔父さんはぼくに厚情をむけてくれて、しかもそれは、まさに必要としていた救いの手だったのだ。

どう考えても、今回は詩織の思い違いにはかならない。

「わたしもまだどういう人かはわからないけど、なにかしら信用できないように思えるの」

「うん」

「だから、なにを言われても彼には簡単に心を許さないようにね」
「わかった」

そこまで言うのなら、とでまかせの返事でごまかしたが、せつか

くの叔父さんの厚意を無下に拒む心など胸の内にはなかった。

そうとは知らず、これでひと安心とうなずく詩織に、なに「こるなくズボンの上から名刺をなぞっていた指がとまり、いささか罪過の念が残った。」

「それで、詩織の話ってなんなの？」

当初の目的である。

詩織は一転、目をそらし一拍おいてから、一意専心ぼくの目を見すえた。

「隼太くんのことよ」

はっと息がやむ。

「隼太のことって、なに」声がわずかに喉のおくから流れおちた。

「隼太くんと、どうしてケンカしたの」

あの夕暮れを思いだすと、いまも膝が震えそうになる。

「隼太が、高校に行かないことを、ぼくにだけ話さなかったんだ」

「だけっていうことは、幸以外の友達には話していたの？」

咎め顔でも慰め顔でもない。詩織はまっすぐぼくを見つめている。

「沙奈には、話したんだ」

考えるだけで、目頭が熱くなる。脈が平静を保てず、血管の諸処が烈しくうちなるのを強く感じた。

「幸、あのね」

詩織はおもむろに居直り、息を吐きだした。

「わたし最近ね、何度か隼太くんから相談を受けていたの」

「隼太が？」

思いかえしてみれば、まさしくそんな気ぶりをみせたことをあつた。

「うん。隼太くんのおうちってお父さんがいなくて、それに一人っ子だから、お母さんをすごく大事にしてるじゃない。お母さんには心配をかけたくなって、それでわたしに悩みをきいてほしかったみたいなの」

隼太は昔から母親思いのお母さんっこだった。

「隼太くん、やさしいから。母子家庭で、お母さんが苦勞する姿をみてきて、できるかぎり心配や迷惑をかけないようにしたかったのね。この気持ち、わたしは痛いほどわかるの。幸も、わかる？」

「うん」

「それでね、いつもはここに來てもらって話を聞くんだけど、この前たまたま外で話すことがあったの」

詩織の顔が、かすかにやわらいだ。

「そのときしていたのが、高校に進学するのをやめようかかっていう話だったの」

そういうことはわたしにも難しいから、よく考えてからお母さんにも話してみないとね、って言っただけで役には立てなかったんだけどね、と詩織は苦い顔をした。

「どういうこと？」ほくも詩織の目を直視する。

「隼太くんはね、わたし以外にはこのことを言っていないのよ。もちろん、沙奈ちゃんにもね。わたしとしたことが大事な話を町中なかでしたものだから、きつと沙奈ちゃんか、沙奈ちゃんの知りあいに聞かれちゃったのね」

そんな。目が眩うような事実だ。

「でも、親友ならばくに教えてくれてもいいのに」

揺れうごく頭では、考えをまとめようにもどうにもまとまらない。まとまらないまま、くずれるように思案のもたない言葉が溢れる。

「幸は三人のなかで、自分だけぬけ者にされたような気がして、それで傷ついたのでよね」

そう。詩織の言うとおりだ。

「それなら、なにも問題はないじゃない。隼太くんが悩みをあかした相手はわたしのよ。わたしは相談されるのが仕事なんだから。隼太くんもそう思っ話してくれたはずよ」

つくねんと佇む隼太の姿が目には浮かんだ。

「それに隼太くんは幸が本当に好きだから、高校に行かないで離ればなれになるなんてこと、打ちあけられなかったんじゃないかな」

「うん。ありがとう、詩織」

詩織の背後に見える冬の庭は、もう、うす暗くなっている。

部屋のあるさで流しそうになった涙を外の暝色で抑えこみ、かたときはずした視線をふたたび詩織にもどした。

詩織はわらっている。

「心配かけてごめん。隼太と話してくる」

すべて承知した、という具合でうなずいた詩織にもう一度お礼を言い、家を出た。

いまなら隼太はまだ学校で部活をしている。

ちらほらと雪が散りかかる街灯のした、強く踏みきった。

近く、必ず家に来るように、という母からの呼びだしは非常に珍しいことで、数日前から気が揉めているのはそのせいだ。

くわえ、先走って榎波に内情をあかし、そのうえ対面までさせてしまった春樹を強く責めつけてからというもの、累日ぎくしゃくした生活をしいられている。

おかげでシャコバサボテンの様子がおかしいことも、春樹にはまだ言えずにいた。

榎波が転勤してきたことを話すと、電話越しにさえ母が血相を一変させたのがわかった。口ぶりから察するに、母は榎波が相当に嫌いらしく、わたしにもあまり交流をもたないよう迫った。

それが昨日の今日のことだから、お昼に榎波が約束を取りつけたきたのには正直うるたえた。そんな場面にこれで二度も立ち会った敏腕探偵の彼女はといえば、いまもって好き放題な空想をやめられずにいる。辟易するわたしを尻目に、榎波は「よわかりましたね」とキザにふるまうだけだった。

とにもかくにも、榎波とは一度腰を据えて話をしてみななければいけないと確信していたから、榎波みずから設けてくれた土俵には、これ幸いと乗る以外なかった。

家は週末にでも行けばいい。きょうこそ、どうもよくわからない榎波の正体をこの目で見極めようと考えていた。

そうして乗りこんだ榎波の車は、わたしの住む町から瞬く間に離れ、いまはもう知らないところを走っている。

「どちらまで行かれるのですか」

「ご安心ください。詩織さんがご存じの場所です」

榎波はそれ以上なにも言わず、もくもくとハンドルをにぎり続けた。途中何度も怖くなったが、そのたびに小首をふって勇気を振り絞っていた。車外には果てしない冬の夕闇がたれこめ、この目では

寂しい街路だけしか捉えられなかった。

「さあ、到着しましたよ」

榎波の誘導で踏み入ったのは、わずかに夕明かりの残る民家の庭先で、一見して普通の平屋に見える近代造りの家屋はわたしの知る場所ではなかった。

「榎波さんのお住まいですか」きいたものの、質素な建物の外観と気取った榎波は到底結びつく関係にみえなかった。

榎波はなにも言わず玄関の鍵を開け、わたしをなかへと進ませた。あかり取りの少ない玄関は外よりなお暗く、踏込みと廊下の段差につまずいてしまった。

「お気をつけて」

榎波に促されるまま、壁に手をあてがい心ばかりの残照をたよりにしながら狭い廊下進む。

あまりの暗さに奥行きがつかめなかったが、通路は比較的短く、すぐにふすま戸の開けはなたれた和室に出た。

「見覚えはございませんか」

うしろから入ってきた榎波がペンダント照明のひもを引っ張り、二部屋続きの和室の外貌があきらかとなった。

家財道具は一応置いてあるが、異様にかびくさい室内には生活感など蚊の涙ほどもなく、しばらく人の手が入っていないでろうつことを察知させられる。

テレビやクーラーといった生活家電は型が若干古そうだが、そこまで大昔の古道具ではない。

だがやはり、どれもこれも見覚えはない。

「まあ覚えてはいらっしゃらないでしょうね」

「あの、榎波さんはいったいなにをされたいんですか。この家は何なんですか？」

もってまわったやり口は意図がつかめないし、なにより気味が悪い。

榎波が、室内でゆいいつ古色を帯びた茶筆筒の中間板をはらうと、

表面に固着していた埃がそこだけ弓形に欠けた。

「こちらの家屋は、現在、私が受け継いで管理しております。詩織さんをお招きするにあたってクリーニングを入れようかとも考えましたが、せつかくです。当時のままお見せすることにしました」
榎波は箆笥のふちに手をかけたまま、こちらに振り向いた。

「そちらに、おかけください」

低い四角テーブルも埃まみれになっている。

わたしは藍青色の座布団に正座した。

「そこは、お父様の席ですよ」

榎波がさしむかいに座る。

「お父様というのは、この家のご主人ということですか」

「違います。あなたのお父様ですよ」

榎波はうすら笑いを浮かべた。

「父の？　ここは父が昔住んでいた家なのですか」

榎波は冷たい表情でわたしを見やった。

「少し、私の身の上話を聞いていただけますか」

もはや榎波の考えていることは理解の範疇を逸脱していた。

「私には姉が一人おりましてね」

声色を動かさず語りはじめる。

「姉夫婦はあるとき玉のような女の子を授かりました。念願が届いた二人は大喜びしまして、姉はかねてより決めていた、詩織、という名をその子につけました」

榎波はわたしを生まれるときから知っているかのように言った。

「しかし、その子が六歳のとき　痛ましくも奇禍に見まわれ、姉夫婦は他界しました」

「えっ」

榎波はなにを言っているのだ。

「両親は生きています、でたらめを言わないでください」

「女の子が小学校にあがったのを記念してでかけた旅行で、家族三人が乗る小型クルーザーが海に沈んだのです」榎波は声の色を変え

ず淡々と続ける。

「待つてください！　いくら小さかったとはいえ、もう物心がついたころのことなら、いまだって覚えています、そんな大嘘を並べてどうされたいのですか」

反駁にも榎波は表情ひとつ変えない。

「女の子だけは奇跡的に一命をとりとめました、外因性の逆行性健忘症により、それまでの記憶を一時的に呼び起こせなくなりました」

海難事故に遭って記憶喪失になったなんて、それはまるで。

「そう。幸くんと同じです」

鋭い目が、さらに細まった。

「私は姉の忘れ形見を不幸にはさせまいと、親代わりになる決心をし、心血を注いで治療にあたることにしました」

榎波の言う言葉はとても信じがたいが、聞いていると喪神しそうになる。

「しかし、慎ましやかな葬儀のあと、日高さんとおっしゃる姉の古くからのご友人夫婦が、ぜひその子を譲ってほしいと願いでてきましてね。そのご夫婦が子宝に恵まれないことを気に病んでいたと知り、私はその申出でを了承しました」

息が、つまる。

「その夫婦が、いまの両親だとおっしゃるのですか」

榎波の耳はわたしの言うことを頑として受けいれない。

「私はその子の人生を一番に考え、最前と思われる治療を施すことにしました」

それはですね、といっそう意地悪な人相になる。

「記憶がもどっていく過程で、その子に虚偽の記憶を刷りこんでいく方法です」

「そんな。そのようなことが許されると思っっているのですか。頭のいいあなたなら、倫理も心得ているはずではありませんか」

「両親を亡くした身のひしは忘れて、新しい父母を本当の親と信じ

て生活したほうが幸せだとは思いませんか」

榎波は、それともいままで幸せではなかったのですか、といやらしく付けくわえた。

嘘だ。こんな人と近い血が流れているとは思えない。

「私と親類関係があるはずないと、そのようなことを考えましたね。そんなことはありませんよ」

ぎくりとして、いつの間にか睨みつけていた視線を榎波から逸らす。

「私どもの家系は皆、人の思うところを細かな挙動や表情から敏感に感じとる力に優れているのです。あなたも私の姉の血を受け継いでいる証拠に、多少なりとも人の思考がわかることがあるはずですよ」

「知りません！」

春樹もそんなことを言っていた気がする。でもわたしは人並みに相手の気持ちを読みとることしかできないと思っている。

「詩織さん、同じ職場で再会したことこそが血だと思いませんか。私もあなたも、まさに導かれるように天職に就いた結果、こうしてふたたび巡り会ったのでしょうか」

「榎波さん、あなたはわたしがいると知っていてセンターにいらっしやっただのですよね。どうして、前にいたところを辞めてまで。こんなことを話すためですか」

榎波は、どうでしたかね、と鼻先で笑った。

「それにしても、その翌年に日高さんご夫妻にお子さんが生まれていたとは存じ上げませんでした」

幸のことを言っているのか。

「詩織さん」榎波は突然責めるような厳しい目つきになった。

「本当は、ご両親とも、幸くんとも、血の繋がりが無いことをご存じだったのではないですか」

榎波は思いがけないことを切りだした。

「そんな。知っているはずがありません」

「そうでしょうか？ あなたもいい大人なのですから、なにかしら

知るきっかけはあつたはずです。ご両親の口から聞いたのか、あるいはご自身でその事実を見つけたのか」

そんなことがあつただろうか。

「あなたは血の繋がりが無いことを知り、幸くんを恋人にしたいと考えたのではないですか」

そんなことあるわけがない。

「幸くんが記憶を失ったとき、あなたはこの好機を逸すまいと、私があなたにやったように、自分が恋人であるという偽りの情報を、幸くんの純真な心に植えつけたのではないですか」

そんなことをするはずがない。幸は、わたしの本当の弟だ。

わたしが姉であると思いだしてほしい。

もしわたしに夢中になつていてるあいだに、幸のまわりから誰もいなくなつてしまつたらどうするといふのだ。いつまでもそばにいてくれる存在が隼太くんだけになつてしまつたら、幸は隼太くんに死ぬまで頼りきつてしまふかもしれない。

そう脳裏をよぎつた瞬間、二人に対しあまりにも失礼なことを考へたと気づき、またいやになつた。

「あなたは、あたかも幸くんが望んで記憶を変じたかのように身内に触れこんでいらつしやつたそうですが、実はご自身が望んでいたことだつたのですね」

違う。榎波の言つていることはすべて間違つている。

いや、それはどうだろうか。

わたしはあの家の本当の子ではないと、知つていた気もする。

「あなたは、先ほど私に倫理を説こうとなさつていましたが、道理にはずれた行為を犯したのはどちらでしょうか？」

わたしは卑しいことをしたのだろうか。

「ご家族にも、ご自分が姉であることを言わないようにと口止めをしたそうですが、普通は現実を認識させるよう努めるものではありませんか。仮にも私と同じ道にいるあなたが、意図せず誤つた判断をしたとは思えません」

恋人にしたかったのはわたしだったのだろうか。

「物欲にとらわれて相沢春樹という男性と結婚したのですよね。しかし、あれだけ年が離れていては、あなたにとって恋愛対象ということはまずありえませんか。あなたは幸くんが好きなほど若い男性を好む女性なのですから」

やっぱりわたしは春樹を愛していなかったのか。

この人まで言うのだから間違いない。

「詩織さん？」

榎波はわたしに真実を教えに来てくれた。

榎波は幸の言うとおり、いいひとだったのか。

だっていまも、お一人で帰れますね、ってタクシー代をこんなにくれた。

頭がくらくらする。

思考がうまく回らない。

どこでタクシーをひろって、どこでおりたかわからないが、家の近く、騒がしい街の中まで帰ってきていた。

夜の繁華街にはクリスマスが押ししまっていて、赤、白、緑の色がそこら中を埋めつくしている。

どこにいても鈴の音や聞き覚えのある陽気な音楽が四方を満たしていて、とても、耳障りだった。

着いた家は真っ暗。

こんな日に限って春樹は遅いだなんて。いや、でも、わたしは春樹を愛していないんだった。

玄関の戸を開け、暗い廊下を歩き、何度も踏みはずしそうになりながら、やっとで階段をあがりきる。

つきあたりは、幸の好きな、わたしの部屋。

倒れこみ、テーブルに目をやると、幸が恋人になった季節に春樹が買ってくれたシャコバサボテンが枯れていた。

もう、なにもかもがどうでもよくなった。

はじめの三日は、春樹が夜を日に継ぎわたしのそばにいてくれた。深夜になつて帰ってきた春樹はすぐにわたしを病院に連れていってくれたのだった。仕事があるのに、わたしなんかのために続けて仕事を休んでくれているみたい。

そのあとの三日は、両親と幸もお見舞いにきてくれた。きっと、わたしがどうしてもよくならないとわかつて、春樹もついに実家に知らせたのだと思う。

ベッドの中から見ると色のない春樹は、常にいや目でわたしを見つめている。わたしが愛していないことを、知ってしまったのだろうか。

ずっといてほしいのに。いなくなつてしまふそつで怖い。

わたしは、ベッドから上半身を起こした。

「春樹」

そばにいて。

春樹は驚いたり、喜んだり表情を変化させた。

「詩織っ、わかる？」

わかるって、なんのことを言っているのかわからない。

春樹はわたしの両腕をつかみ、しばらくそのままできて、また悲しい表情になつた。

どうしたんだろっ。

「春樹？」

「詩織、ぼくだよ」

知ってる。春樹だ。

だから呼んだのに。春樹ったらなにを言っているのだろう。

春樹はわたしの前で、意味不明な身ぶり手ぶりをさかんにした。

なにしているの、春樹？

春樹は答えずに、また意気消沈した様子でわたしになにか言った。

そういえば、春樹に伝えなければならぬ話をきちんと伝えただろうか。

取りかえしのつかない過ちを、謝らなければならないのに。

春樹が、病室を出ていこうとする。

待って。

「春樹」

わたしから去ってしまう前に、せめて謝らせて。

「詩織」

駆け寄り、大きな手でわたしの両手を包む。

「春樹、」

「ごめんなさい。長いあいだ、あざむき続けて。

「詩織」

さつきは気づかなかったが、ふたたび顔を近寄らせてきた春樹の目は充血しているようだった。

わたしを心配して泣いてくれたり、寝も寝られずに過ごしてきたのだろうか。

春樹、

「ありがとう」

「こんな、わたしのために。」

「詩織」

すっかり、しゃがれてしまっている。

わたしも声を出すのが、これほどつらいなんて思わなかった。

ああ、そうか。

「春樹」

わたし、考えているばかりで声に出していなかったんだ。

「詩織、ぼくがわかる？」

だから春樹は心配していたんだ。

いくらつらくても、この口から真情を白状して、春樹に詫びなければいけないんだ。

春樹は泣きそうだ。

そんな顔をされると、わたしまで悲しくなってくる。

「春樹、わかるわ」

春樹は手を握る力を強くした。

わたしは何年かぶりで男の人の涙を見た。

「詩織」

「ごめんね。わたしずっと眠っていたのかしら」

わたしは春樹に強く抱きしめられた。

さっきまで白黒に見えていた春樹は、ほんとうは鮮やかな人間の色をしていた。

窓から見える空も、その下で、ちらつく風花を受け続けるアスファルトの地面も、最後に見た日のまま変わっていない。

春樹、わたしもう大丈夫よ。

退院してからの数日間は養生を、と春樹が仕事を休めるよう手を回してくれた。

「一週間も病院にいたのね、ごめんなさい」と言うと、春樹は「いいんだよ」と頭をなでてくれた。

わたしはいつも人の華奢な内側と向きあっていたが、その実、自分も恐ろしく脆弱な神経をしていたのだと、この数日であらためて気づかされた。

春樹なしでは、とても立ち直れなかった。

春樹の力強い支えがあったから、午前中に来訪した両親とはおちついて話げできたし、告げられた現実も受けとめられた。

むせぶ母の横で父も涙を浮かべていて、わたしも泣いた。

榎波の言ったとおり、わたしには両親と幸との血の繋がりが無いのだという。

いつか言おうと時機を窺っているうち、わたしが早く家を出てしまい、ついに話せなかったのだという。

十数年間おくびにも出さずにいた両親の気苦労はとても想像できたものではない。

みんな泣きに泣いたが、わたしは両親に愛されていることを知っていたから、これから、立ちなおっていけると思う。

それよりも、いまから春樹にする告白の方が気重だった。

大切なことを打ちあけなければならぬ。

「きょうは午前中からずっと雪空ね」

「そうだね」

春樹はコーヒーのカップをリビングに持ってきた。

「いま飲んだら眠れなくなっちゃうわよ」

「薄く入れたから大丈夫じゃないかな」

一口飲み、春樹もむかいのソファに腰をおろした。

「ほんとう、朝からぐずぐずの天気だね」

空はうす暗く、まだお昼過ぎだというのに部屋の照明は朝からつけっぱなしにしてある。

「いつそ思いきり大雪でも降ってくれたほうが気持ちいいわ」

春樹は笑顔でカップに口をつけた。

「無理して起きていなくてもいいんだよ。詩織は病みあがりなんだから。朝も起きてずっと両親とお話していたし、疲れたんじゃないかな？」

両親と話をしているあいだ、春樹には席をはずしてもらっていた。だが、榎波との出来事はきのうのあいだにいくらか前触れを済ませていたから、この話し合いでわたしの生い立ちがいよいよ実際となったのだと春樹は確信し、ショックを受けただろうとわたしの心にかけてくれているのだ。

「でも、いいの」

春樹にまだ伝えていない大切な話があるから。

春樹を愛していないこと、それと、幸の記憶を操作したのはわたしだったということ。

ゆつくりと、ただどしく説明するわたしの話に、春樹は何度もうなずいた。

涙ぐみそうになりながら、その都度、春樹の言に励まされて掻き崩し話し続けた。

「春樹、ごめんなさい」

春樹を愛していなかったことも、弟に卑劣を働く恐ろしい本性を隠していたことも。

春樹はしばらくにも言わず、わたしが言い終えたところには半分以上残っていたコーヒーマも、いまはお互い空になっていた。

「詩織」

わたしは、春樹からどんな宣告を受けてもやむないと覚悟していた。

「いま詩織が言ったことは、榎波という男が言っていただけのこと

だよね」

「ええ。でも、わたしもそのとおりなんだと思っただわ」

「榎波は信憑するに足る人間性の持ち主なのかな」

父は言っていた。榎波は昔から自我が強く、どうしようもない人だったと。

たとえ姪であれ、人を人とも思わぬ利己主義の曲学者が、自分の意のままにできる人間を手元に置いてしまえば、その子は、まっとうな人格など育まれずに成長していっただろうと。

そんな人間に、未来ある幼い子供をむざむざと託すわけにはいかないからというのが、わたしをひきとるに至った最大の理由だったそうだ。

父はとくに榎波の性格を知っていて、強引にでもわたしを榎波から奪いとる覚悟があったらしい。

榎波の前ではそんな気色を見みせずには愛想よくしていたそうだが、榎波はきつと、自分を心の底では悪魔のように思い、毛嫌いしていた父と母の内懐に感じていて、そんな両親を片恨みし、家族関係を踏みしだくために、わざわざここまで来たのだと。そういう男なのだ。

「……でも、榎波の言うことに納得してしまうのよ」

「詩織、しっかりして。よく考えればわかるはずだよ。ほんとうにぼくを愛していなかった？ 幸くんにそんなことをした？」

また頭の中が、ぐるぐる回転する。

した、と言われればした気がする。

だって榎波の言うことは確かなことが多かった。

たとえば。そう、たとえば、わたしがあの家の養女であったこと。それをわたし自身もずっと知っていたこと。中学生のころか、高校生のころか。知ったときからずっと忘れていた、ような気がする。

「わたし、榎波の言うとおり、あの家族のなかで自分だけ血の繋がりが無いことを知っていたわ。それも、ずっと昔から」

ああ、そうだ。小学校を卒業した年に知ったんだ。

淡い燐光がぼつぼつと灯るように、とじこもっていた記憶が思い起こされてくる。

そうなのだ。

それを知ってしまったときに、早く家を出ようと決意したのだ。

両親も幸も好きだったけど、好きだったからこそ、他人の子のわたくしが迷惑をかけてはいけないと思った。だから、高校を卒業しただけに就職したのだ。

家を出て独立するのを急いでいたのは、肝胆にあつた哀しい決心からだっただ。

だが春樹に出会い、期せずしてその時機は早まった。経済力のあつた春樹。この人と結婚すれば、すぐにでも家を出られると思つた。

「でもね」

でも、春樹を愛していないわけではなかつた。

春樹を愛していないと思つたのは、結婚するのに少しでも自分勝手な事情があつたから、その罪悪感からだ。

それでも。

「それでも、やっぱり春樹を愛しているわ」

わたしを一番に想つてくれる。いま、目の前で温容を浮かべているこの人を。

「一時でも、愛を疑ってしまったらごめんなさい」

春樹の愛を疑つたのではない。

自分の愛を疑ってしまったのだ。

春樹は立ちあがり、窓ぎわで手招きした。

「見てごらん」

巻く風のせいで、堆く積もつた雪が高くまで舞いあげられていく。

「ほら、詩織。こつやつて窓に顔をつけて上を覗くとね」

まるで、雪も樹も、なにもかもが遙か空に落ちていくみたい。

詩織と一緒に除夜の鐘を聴くのはこれで三度目だ。

おとしはこうやって家の庭で、前年は彼女の実家で、年越しそばを食べながらみんなでテレビ伝いに音を聴いた。

「春樹、おそばを茹でてくるわ」

暗がり之際だつものは、遠くからする鐘の音と、いま一步踏みだして足下の雪を鳴らした彼女だけだ。

「詩織」

ぼくの愛しいひとは、笑顔で身をひるがえした。

「冗談よ。最後までいっしょに聴きましょう」

腕にしがみつくと詩織は、ぼくよりも顔ひとつぶんだけ背が低い。

詩織、と言いかけたところで、彼女は口元にすつと手をやった。

「ほら、春樹。聞こえない？」

そう言い、目を閉じてなにかに耳を澄ました。

空を見あげても、黒い幕には凍て星が散っておかれているだけでその姿は捉えることができなかったが、たしかに夜空を裂くような鋭く閑雅な鳥の高音は上空を突きぬけ、そしてすぐ低い静寂に掻き消された。

「ねえ春樹、このあいだの鳥かな」

「そうかもしれないね」

いまのいままで気づかなかつたが、きょうの空には満月がのぼっていた。凜冽の気が充溢する漆黒に対置する姿は、この数年をかえりみても別格といえるだろう。

どつりで、ここのとこ暗みの見えかくれしていた詩織が、色調冴えてよく見える。

「お母さんのおせちが楽しみだわ」

「ぼくも、一年ぶりの栗きんとんが楽しみだよ」

夜が明けたら、毎年のとおり詩織の家に寄り、その足で神社にお

もむく。

「今年は幸くんの受験祈願があるからね。どこか御利益のある神社に行ってみようか」

「そんなことしたら、いつも願立っている神社の神さまに悪いわ」

「そういうものかな」

「そういうものよ」

気持ちのいいくらい口ざっぱりと言いきられる。

さばけた口上の彼女は、やはり、似ている。

あの話し合いのあと、ぼくと詩織の絆はより深くなった。だが、

詩織とご両親、幸くんとの絆は。

詩織は、もう受け入れたから平気だと言う。当然ご両親が詩織を想う心も変わらないだろう。

だからといって、心に織芥ひとつ残さずきれいさっぱりこれまでどおり、といくほど人の縁はたやすくなく、もっとも簡潔で確実な、『血の縁』の断絶が確然としてしまったのだ。

同じ境遇に立ってみなければ感じられない、想像を絶する痛みがあることだろう。

げんに、これまで徹底して気丈な立ち振る舞いをしてきた詩織が、あれから一度だけ、幸くんに嫉妬してしまうとこぼしたのだ。彼女の気性からは考えられない言葉だ。

幸くんは成長するにつれ、趣向はお母さんに、性質はお父さんに似てきたのだという。

詩織は、それをうらやましく思ってしまうそうだ。

だがぼくは、うらやましがする必要などないのにな、と思っている。なぜなら、詩織自身は知らない、真実に気づいていたからだ。

やはり、彼女は似ていたのだ。

「春樹」

「ん」

よく見れば、詩織は耳が真っ赤だ。

「どうしたの、詩織」

詩織は小さなからだで背伸びし、とても近くから言った。

「幸には悪いけど、やっぱり春樹は、わたしにとってお父さんじゃなくて、旦那さんね」

「なんのことかな」

詩織は答えずに、からだをぼくに凭れかけた。

彼女の瞳には、ぼくがどう映っているのだろうか。

彼女が口をつぐんでしまうなら、それは最後までぼくの知りえない玉手箱なのだろう。

ただ、その目になにかが見えていたように、僕の目にもまた真理が映っていた。

彼女は、似ている。

さらりと流れる、竹を割ったような性格。家族をいとおしむ母性は、彼女のお母さんに生き写しの美質だ。

悩み事や苦労事をひとり諒解し、誰にも言わず自分の胸だけに置いて生きる健気な姿。ともすれば、一心でもって事物に臨む逞しさは、彼女のお父さんそのままだ。

詩織は知らないだろうが、たしかに二人は、詩織の両親だった。

彼女の目は、周りにばかり気を配り、自分をみる力に乏しいようだ。他人の心は、緻密に張りめぐらされた神経をもすり抜けて奥深くまで見とおせるのに、あたかもその代償かのように、彼女の心は見ぬけない。

それならば、自身をみなおせる余裕を生みだせるようにぼくが助勢しよう。それでも難しければ、生涯、ぼくの目が彼女のかわりに彼女の心の内を映せばいい。

それが夫の役目なのだから。

彼女の目に夫として映ったのは、ぼくなのだから。

衝動で、詩織の手をとる。

「どうしたの、春樹」

彼女は顔を寄せ、斜め下から質問を投げかける。

「うん」

つかんだまま胸あたりまでもってきて、小さな素手を平手側から握りしめる。彼女の手の甲にあてた指が、先の方からと沈みこんでいってしまいそうな湿り気がある。

こぶし一つ引き寄せてよく観察すると、指関節がほのかにピンクがかっていた。

「詩織、寒くない？」

「春樹は大丈夫？」

反問してうまく返答から逃れたが、夜の冷たさは女性の柔肌などとうに貫いていたに違いない。

「ぼくは大丈夫だよ」

「うん」

すでに芯まで冷えきっていたかもしれないが、鐘が終わるまでは、断固として、ぼくといてくれるのだろう。

詩織は凍える手で首元に巻かれた青色のマフラーを握りしめた。

「幸くと隼太くん、仲直りできてよかったね」

詩織は笑顔のまま、無言でうなずいた。

彼女は誕生日が十二月の二十七日で、クリスマスと日にちが近いがゆえに、プレゼントはいつも誕生日のぶんもひっくるめてクリスマスにひとつもらっただけだったと嘆いていた。

「だけどいいの、と詩織は言った。」

誕生日にはお母さんが手作りのケーキでお祝いしてくれるし、それに幸が、毎年必ず自分で用意した誕生日プレゼントを贈ってくれるの、とも。

今年の誕生日プレゼントはなんだった？ ときいたぼくに、詩織は暖かそうな青い毛糸のマフラーを見せてくれた。幸は隼太くんと今年で親友十周年だから、その記念の合作なんだって、と満面をほころばせたのだった。

「ねえ、春樹」

詩織の手が、ぼくの腕を小さく二回引っぱった。

「隼太くんがね、最近になって幸を特別好きになったっていうのは、やっぱりわたしの思い違いじゃなかったと思うの。でもね」

でも、やっぱり二人はいまのままずっと親友でいて、いつかは、それぞれに幸せな家庭をもつようになると思うわ、と朗色を浮かべた。

「詩織が言うなら間違いはないね」

笑顔でうなづく。

それにしても、と詩織は言う。

「このマフラー。男の子だけで、よくここまでのものができたと感心するわ」

「そうだね」

「発案はたぶん隼太くんなのよ、お母さんが手芸の先生だから。毎年のことだからさすがに幸もネタが尽きちゃって、隼太くんにアイディアを求めたんだと思うわ」

「うん」

「けど男の子ふたりが手編みのプレゼントだなんて、ちょっと笑っちゃう」

「幸くんはインドア派だから」

ときおり詩織は、もう少しやんちゃに育ってほしかった、と残念がる。

「でも、それが幸くんのもち味だからね」

「うん。知ってる」

うれしそうに言った。

詩織がこのときしていたような顔を見るのが、ぼくは好きだった。やがて、いんいんと響いていた鐘の音は消え、真の夜が訪れた。

ぼくは詩織に言っておきたいことがあった。

「まだ外にいても大丈夫？」

密着する詩織からは、寒そうに震える振動がかすかに伝わってくる。

詩織は「へばりついてるから寒くない」と息を白くして言った。

「幸くんのことをね、考えたんだ」

詩織は黙然とぼくを見あげる。

「ぼくが思うにね、詩織が血の繋がったお姉さんじゃないってこと、幸くんも知っていたんじゃないかな」

詩織は一心にききいつている。

「そうになると、両親も兄弟もない詩織は孤独だろ。知ってしまったからには自分も赤の他人だと思ってしまつて、そんな自分が、詩織になにをしてやれるのか悩んだと思うんだ」

詩織の恋人になりたいとか、結婚したいとか、そういうことではなくて。

「家族になりたかつたんじゃないかな」

いつかは離ればなれになる姉と弟ではなく。

「せめて自分だけでも、永遠にそばにいてあげられる家族でいれば、詩織は独りじゃなくなるんじゃないか、って考えたと、ぼくは思っただ」

「でもわたしには春樹がいるわ。それは幸だつてわかつてるわよ」

頭をかいて、詩織を見おろす。

「ぼくじゃ頼りないってことかな」

詩織は腕に顔を押しつけ、どうかな、と福々しく言った。

「そういえば、幸くん。退院してからしばらくは、よくここに遊びにきていたね」

もしかして、ぼくが詩織にふさわしいか調査するために通っていたのかな、と冗談めかすと、「きつとそうよ」詩織は真顔で応じた。「だとしたら幸はきつと近いうちに思いだすわ。春樹をしつかり観察して安心したはずだもの」

詩織は一段と強くぼくの腕を抱きこみ、足下で真っ白い地を鳴かせた。

ときどき、詩織は右手を自分の胸にあてて空を仰ぎ見ることがある。ぼくはなにか願いごとやお祈りをしているのかと思ったが、き

くとそうではなかった。

「無宗教だもの、祈願は年一度の初詣で十分」じゃあなんだろうと言うばかりに詩織は、「途方もなくいいことがあったとき、なにかにお礼を言いたくならない？」と笑顔を返したのだった。

いまま詩織はぼくにくつついて、それでいながらぼくを通りこし遠い惣闇を見つめている。

「詩織、いまはなにをしているんだい」

詩織はふつと意識を取りもどし、ぼくの存在を思いだした。

「えっとね」

そう言っただけ彼女は、今年になって一番はじめの笑顔をぼくにくれた。

「すばらしい一年を過ごせたことを、この空にお礼していたの」

詩織はまた笑って、ぼくはそれを見つめなおした。

「さあ、朝になったら出発だよ。そろそろなかに入って暖まるうか」

「うん。わたしの恋人が待ってるんだものね」

両腕を放って伸びをした詩織の声は、空で羽ばたいた一羽の初声に共鳴した。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7580s/>

樹の、落ちる空に

2011年4月28日02時10分発行